

宇土城跡（西岡台）II

宇土市埋蔵文化財調査報告書第18集

1988

熊本県宇土市教育委員会

宇土城跡（西岡台）II

宇土市埋蔵文化財調査報告書第18集

1988

熊本県宇土市教育委員会



序

宇土城は、中世の宇土を支配した、宇土氏・名和氏の居城であり、昭和54年に国指定史跡となりました。以来、史跡の公有化と保存整備の事業を実施しております。

本書は、宇土城跡保存修理事業に伴う発掘調査報告書です。調査は、国・県の補助を受け実施し、今後の整備に活かされる成果を得ることが出来ました。

また、本城跡の所在する轟地区には、轟貝塚・仮又古墳・宇土城跡（城山）・轟泉水道など数多くの文化財がありますので、本城跡を拠点に、これらの文化遺産が歴史教育・生涯学習の場として老若男女を問わず活用されることを望みます。

なお、調査において指導・協力を賜りました各位、並びに文化庁・熊本県教育委員会に対し、厚くお礼申し上げます次第です。

昭和63年3月

宇土市教育委員会

教育長 白石喜久雄

例 言

1. 本書は史跡宇土城跡保存修理事業に伴う発掘調査報告書である。
2. 調査に当たっては、昭和62年度の国庫補助、県費補助を受け実施した。調査名を宇土城跡(西岡台)第3次発掘調査とする。
3. 城跡の名称は、小西行長が築いた宇土城跡(城山)と区別するため宇土城跡(西岡台)を用いた。
4. 調査は、宇土市教育委員会が調査主体で実施し、出土遺物、その他の関係資料の保管も行っている。
5. 遺構・遺物の実測は木下洋介・元松茂樹が、製図は主に今村友香が行い、執筆・編集には木下・元松が当たった。

本文目次

第1章 序 章	1
1. 1 はじめに	1
1. 2 調査の組織	1
1. 3 調査の経過	2
第2章 立地と環境	3
2. 1 立地と縄張	3
2. 2 歴史的環境	7
第3章 これまでの調査	9
3. 1 第1次調査の概要	9
3. 2 第2次調査の概要	11
第4章 調査の記録	12
4. 1 遺 構	12
4.1.1 T8701調査地	12
4.1.2 T8702調査地	12
4.1.3 T8703調査地	15
4.1.4 T8704調査地	16
4.1.5 T8705調査地	16
4.1.6 T8706調査地	24
4.1.7 T8707調査地	24
4. 2 遺 物	26
4. 3 小 結	27
第5章 最後 に	28

挿 図 目 次

第1図 主要城館跡位置図 (1/200,000)	21
..... 4	
第2図 周辺遺跡分布図 (1/25,000) ...	5
第3図 地形図 (1/4,000)	6
第4図 T8701調査地実測図 (1/100) ...	12
第5図 調査地配置図 (1/600)	13
第6図 T8702調査地実測図 (1/100) ...	15
第7図 T8703調査地実測図 (1/100) ...	15
第8図 T8704調査地実測図 (1/100) ...	17
第9図 T8705調査地実測図 (1/200) ...	19
第10図 T8705調査地東側実測図 (1/100)	
第11図 T8705調査地中央部実測図 (1/100)	23
第12図 T8705調査地西側実測図 (1/100)	23
第13図 SD08断面図 (1/30)	24
第14図 T8706調査地実測図 (1/100) ...	25
第15図 T8707調査地実測図 (1/100) ...	26
第16図 出土遺物実測図 (2/3)	26
第17図 旧地形復原図	27

図 版 目 次

図版1 宇土城跡 (西岡台) 空中写真	31
図版2 宇土城跡 (西岡台) 遠景	32
図版3 T8701調査地	33
図版4 T8702調査地	33
図版5 T8703調査地	34
図版6 T8703紡錘車出土状態	34
図版7 T8704調査地全景	35
図版8 SA870401	35
図版9 T8705調査地全景1 (東から) ...	36
図版10 T8705調査地全景2 (東から) ...	36
図版11 T8705調査地全景3 (西から) ...	37
図版12 T8705調査地東部分	37
図版13 T8705調査地西部分	38
図版14 T8705調査地中央部分	38
図版15 T8705調査地東部分遺構検出状況	
.....	39
図版16 SA870501	39
図版17 SD08屈折部分	40
図版18 SX870501	40
図版19 SD08土層断面	41
図版20 T8706調査地	42
図版21 T8707調査地	42
図版22 出土遺物	42

第1章 序 章

1. 1 はじめに

宇土市街地の南西に位置する宇土城跡（西岡台）は、市立鶴城中学校の移転計画により昭和49年3月から第1次の発掘調査を実施した。調査の結果、中学校の移転は見送られ、昭和54年3月12日に国指定の史跡となった。指定の規準は、特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定規準史跡2（城跡）による。また、指定地内には城郭遺構の他にも縄文時代の貝塚や古墳時代前期の大規模なV字溝なども存在し、昭和58年12月からの第2次調査では、縄文時代のドングリの貯蔵穴も確認した。

指定地は昭和52年から公有化を図り、整備完了地区はすでに一般に開放しているが、城跡の主体となる部分の整備は未着手の状態である。また、数年前からは遺跡の一部が崩壊し始めたため、その抑止工事を行っている。

ところで、指定地の面積は、地積調査により10万㎡以上になることが判り、これまでの調査面積と比較した場合、発掘調査の面積は全体の3%にも達していない。今後の本格的な整備には、さらに詳しく遺跡の状態を把握することが必要であること、文化庁記念物課加藤調査官の指導を受け、整備事業のための発掘調査を開始するに至った。

1. 2 調査の組織

調査主体	宇土市教育委員会 教育長 船田 至（前任） 白石喜久雄（後任）
調査総務	社会教育課長 本郷 裕幸（前任） 白石喜久雄（後任、教育長兼務） 文化振興係長 一 宗 雄
調査庶務	参事 中野照子
調査担当	主事 木下洋介
調査補助	元松茂樹・松尾政義・中村次則・宇都聡・松内邦子・白石節子 園川キヌ子・井上タツエ・本郷ノブ子
遺物整理	今村友香・青木勝士

1. 3 調査の経過

宇土城跡（西岡台）の発掘調査は昭和63年9月17日に開始し12月25日に終了した。

作業は、城跡のほとんどが竹に覆われているので伐開・除根にかなりの労力を費やした。調査面積の割には遺構が少なく後半には重機を用い除根作業を行った。また、作業には熊本県教育委員会が実施した曾畑貝塚の調査に参加された方々に遠方より協力願った。発掘調査の対象が中世城郭ということではじめは戸惑いもあったが、慣れた手つきで作業が進行した。調査に当たっては、作業員の方をはじめ多くの方々の協力を得ることが出来ました。ここに感謝の意を表します。

作業工程は次表に示すとおりである。

調査地	9月				10月						11月					12月							
	17	20	25	30	5	10	15	20	25	30	31	5	10	15	20	25	30	5	10	15	20	25	
87-01	■																						
87-02	■																						
87-03				■	■	■	■	■	■	■													
87-04				■	■	■	■	■	■	■													
87-05				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
87-06												■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
87-07												■	■	■	■	■	■					■	■
その他	■																						

工程表

第2章 立地と環境

2. 1 立地と縄張

熊本県のほぼ中央部から西方へ突出した宇土半島基部には沖積平野が広がり、その中央からやや西寄りに宇土市街地が北東から南西の方向に延びている。

市街地の南西端に、小西行長築城の宇土城跡(城山)標高16mの近世城があり、宇土城跡(西岡台)は、その西側に位置する。城跡の西には、轟貝塚があり背後の山塊へと続く。また、城跡の南には宇土半島の山塊(主峰大岳標高478m)のひとつの白山(標高218m)が位置し、眼下に城内を望むことが出来る。

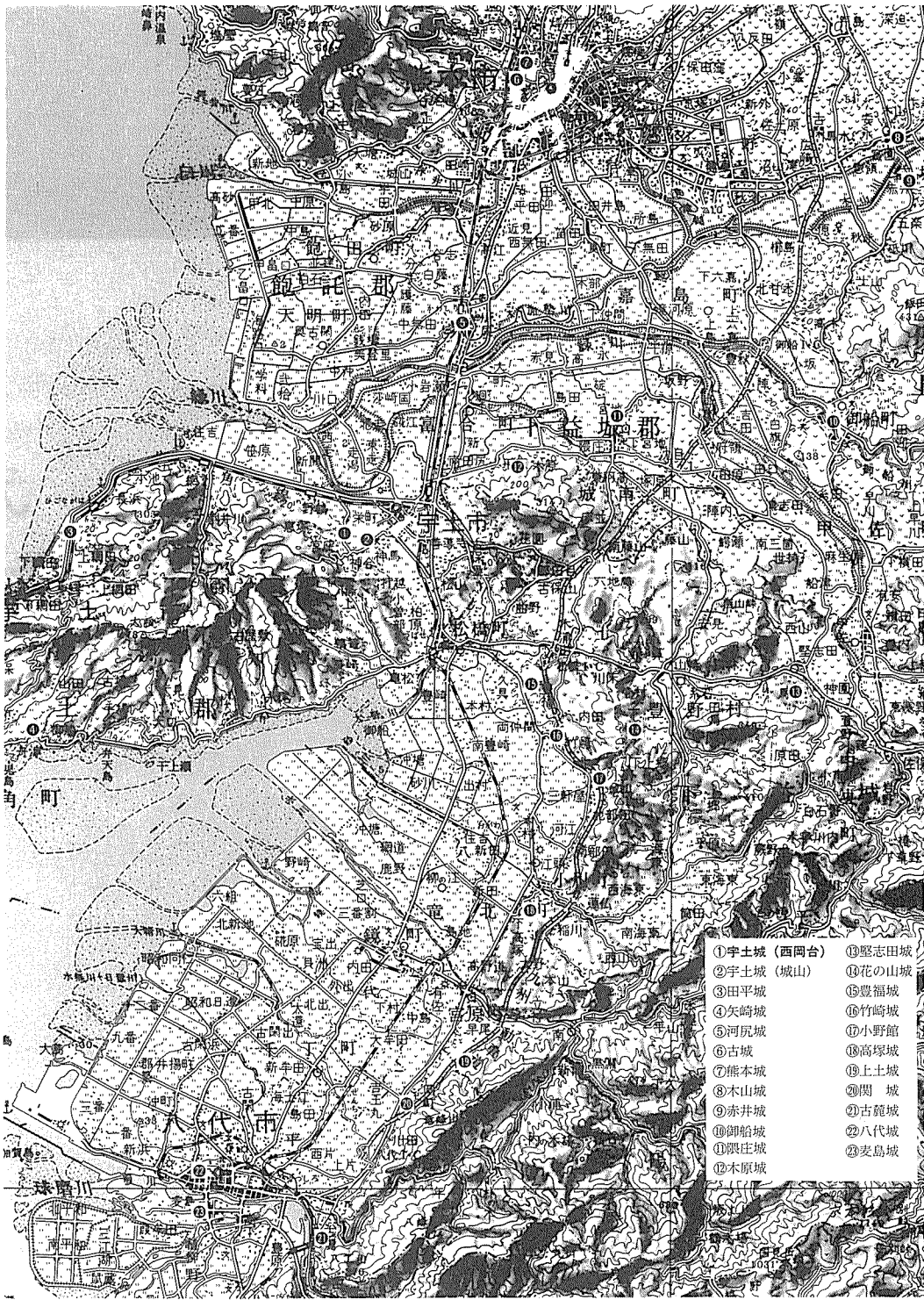
城跡は、熊本県宇土市神馬町に所在し、東西約700m、南北約350mを測り、一辺の長い三角形を呈する丘陵で、北側は急傾斜、南側はなだらかな傾斜地である。また、基盤をなす層は角礫凝灰岩で崩壊しやすい土質である。丘陵上には2ヶ所の高位部があり、東側を千畳敷(せんじょうじき)、西側を三城(さんのじょう)と呼び、標高37.0m、39.1mをそれぞれ測る。現在、周囲には水田が広がっているが、『肥後宇土軍記』にみるように、当時は沼であったと推察される。

縄張 城郭の主郭は、千畳敷で頂部平場65m×50mは未調査であるが、これを取り巻くように最大幅約5m、深さ2.5mの箱堀が検出されている。この堀の底から頂部までの比高差は、約6mを測り、急崖を形成し主郭の防御をなす。

また、三城は第二の郭で比高差3mの削りだしで、東西約80m南北約35mの独立部を形成している。平場の東側には門跡と登り口とこれに続く古道が確認され、門跡の周辺には柵列も検出されている。また、平場の中央部には掘立柱建物跡や溝などが確認されている。

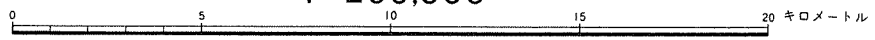
城跡の西側には大規模な空堀と並行して土塁が存在する。空堀は、城の西側部分を分断するように、北西端から南西端まで約310mがいまも残っている。その規模は幅10~15m、深さ7~15m、底の幅5~7mを測り、断面は逆台形を呈する。また、土塁は堀に並行して西側(城の外側)にある。幅5~7m、高さは外側約2m、堀側3~4mの規模である。

つまり、宇土城は北、東、南側は自然の要害(沼)を利用し、西側の山稜からの攻めに対しては、土塁と空堀を築き、独立郭やそれを囲む箱堀または柵列などによる防御を行う城郭である。

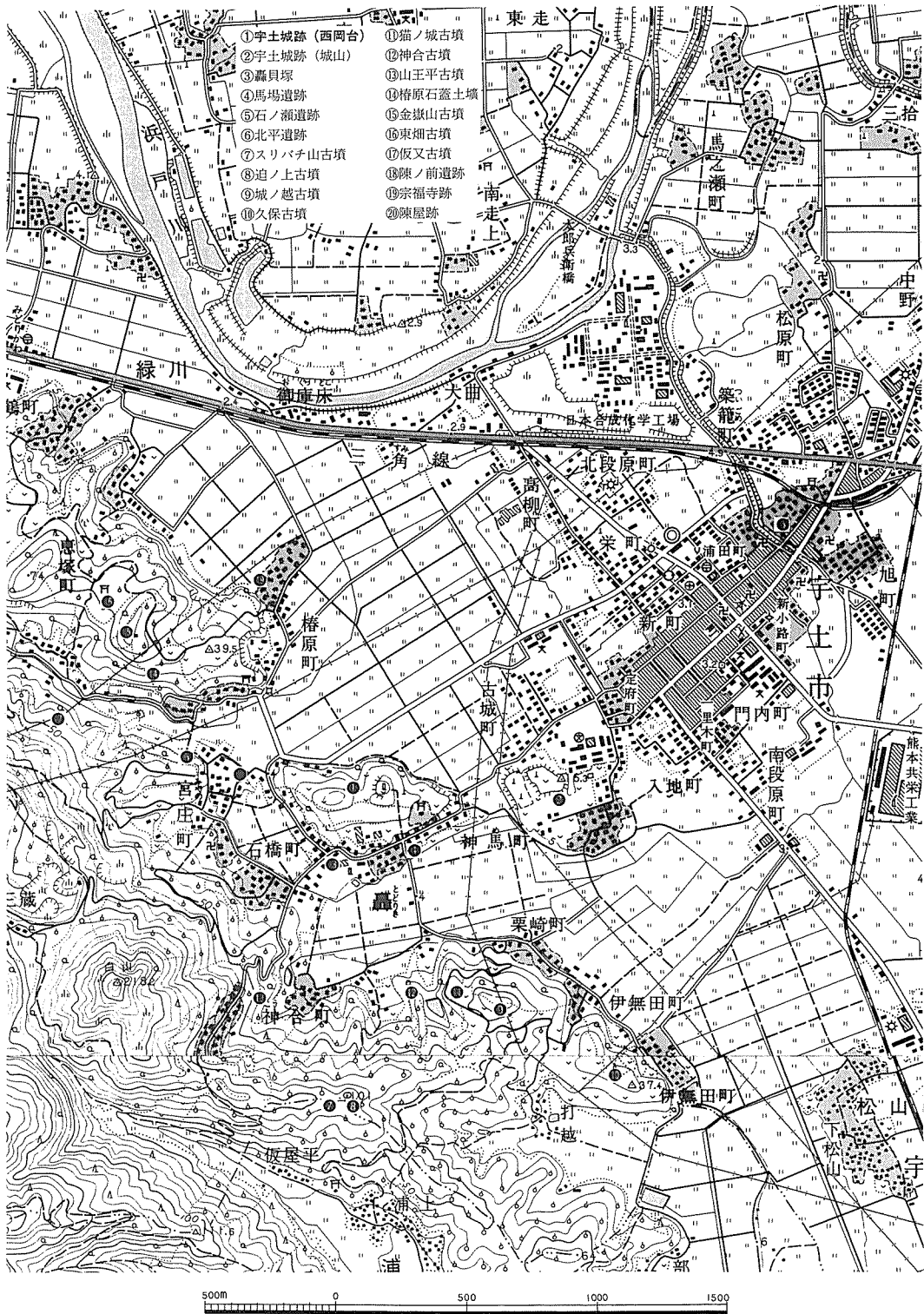


- | | |
|------------|-------|
| ①宇土城 (西岡台) | ⑩堅志田城 |
| ②宇土城 (城山) | ⑪花の山城 |
| ③田平城 | ⑫豊福城 |
| ④矢崎城 | ⑬竹崎城 |
| ⑤河尻城 | ⑭小野館 |
| ⑥古城 | ⑮高塚城 |
| ⑦熊本城 | ⑯上土城 |
| ⑧木山城 | ⑰関城 |
| ⑨赤井城 | ⑱古籠城 |
| ⑲御船城 | ⑳八代城 |
| ⑳隈住城 | ㉑麦島城 |
| ㉒本原城 | |

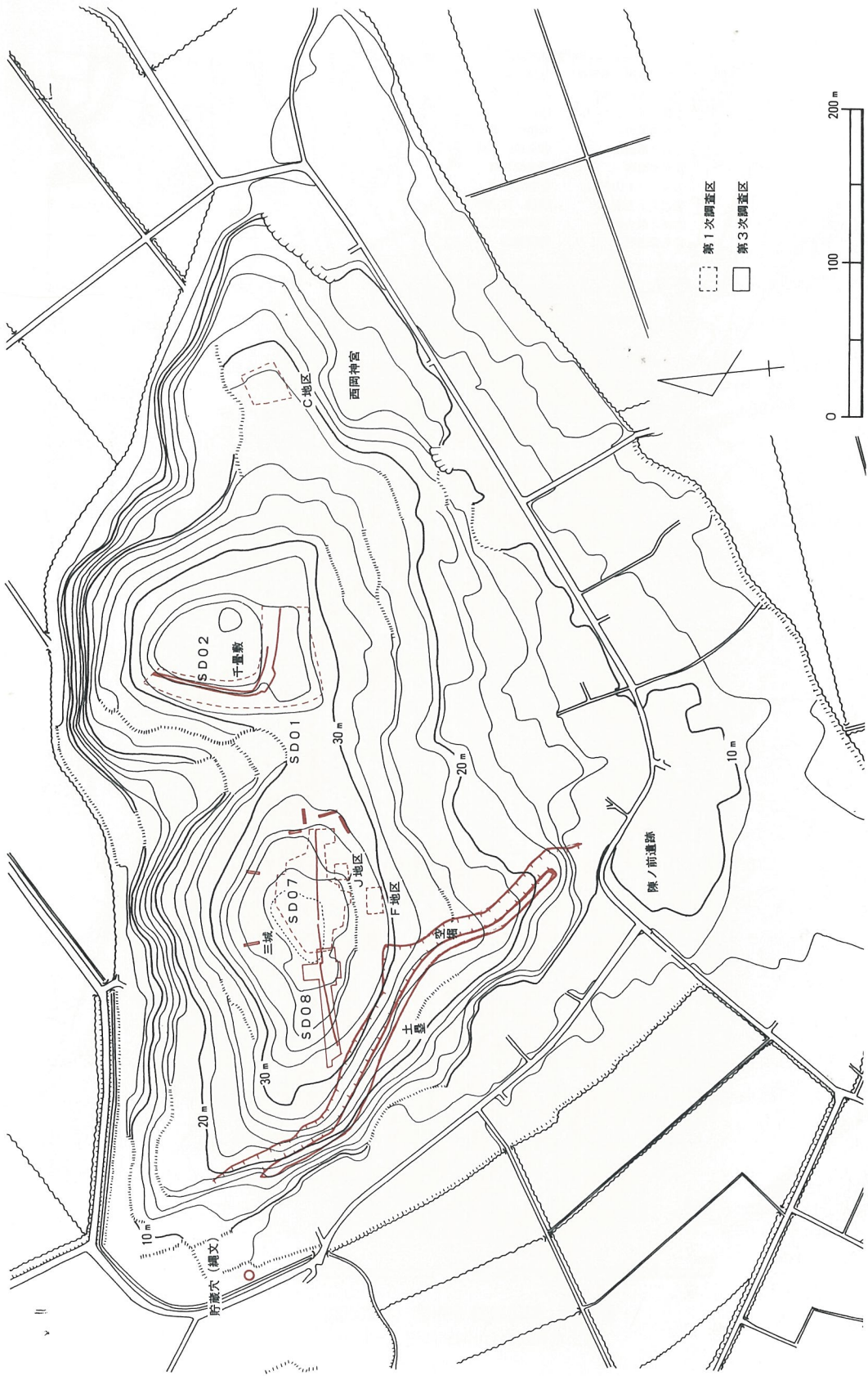
1 : 200,000



第1図 主要城館跡位置図 (1/200000)
 (国土地理院発行1/200000熊本・八代)



第2図 周辺遺跡分布図 (1/25000)
 (国土地理院発行1/25000宇土・松橋)



第3図 地形図 (1/4000)

2. 2 歴史的環境

宇土城跡（西岡台）は中世城郭であるとともに、縄文貝塚、古墳時代前期のV字溝が存在する遺跡である。また、周辺には轟貝塚をはじめ、数多くの遺跡が分布する。本項では、本遺跡と周辺地域の遺跡について、時代順に眺めてみたい。

縄文時代 本遺跡の北西部には、西岡台貝塚が位置する。地形的には、中世城に組み込まれている。第1次調査では、貝層、第2次調査では貯蔵穴の調査が行われている。貝層は早期末から後期にかけて、形成されたものと考えられている。また、貯蔵穴は前期から中期の所産とみられ、堅果類が多量に出土した1号貯蔵穴では、イチイガシ、アカガシ、シラカシなどが確認されている。西岡台貝塚の北西には、轟式土器の標式遺跡である轟貝塚が対峙する。時期は、ほぼ同時期である。その他には、丘陵の南縁に馬場遺跡があり、曾畑式土器が出土している。

弥生時代 この時代のほぼ全期にわたり存在が確認されているのは、本遺跡の東に位置する宇土城跡（城山）がある。前期のV字溝、中期の甕棺、後期の土器溜りなどが確認されている。また、前期末から中期前半の石ノ瀬遺跡、中期中頃の北平遺跡があり、本遺跡からは、袋状口縁の土器が採集されている。

古墳時代 古墳時代になると、半島基部には前方後円墳が築かれる、城跡から南に望む尾根上には、城ノ越古墳、スリバチ山古墳、迫ノ上古墳の4世紀後半の前方後円墳がある

本遺跡の前期のV字溝から、多量に古式土師器が出土している。また丘陵の東には箱式石棺が確認されている。後期になると周辺丘陵の中腹に、横穴式石室を内部主体にもつ円墳が築かれる。それらには、山王平古墳、東畑古墳、金嶽山古墳、仮又古墳などがある。

古 代 現在のところ近くには、この時代の遺跡は確認されていない。平野を挟んで東方の境目遺跡から石製丸鞆が出土している。

中 世 この時代は、宇土城（西岡台）を中心に展開したものと思われる。宇土庄は蓮華王院領に属し、元徳二年（1330）六月宇土庄地頭職宇土三郎高俊が現れ、菊池氏の一族の宇土為光、文亀四年（1504）から天正十六年（1588）まで、名和氏が宇土城を居城としていたと考えられる。遺跡としては、宇土城跡（城山）から、正平五年（1350）八月十九日銘の壱岐守高俊逆修の五輪塔の地輪が出土している。これは、宇土城跡（城山）の石垣に転用されたとみられ、もともとの所在ははっきりしない。また、宗福寺は名和氏の菩提寺で境内には名和行直の墓がある。ところで、天正十五年（1587）の秀吉の九州征伐により中世の終わりと考えられる。同年四月十日、宇土城は開城、加藤清正を城番に置く。

近 世 佐々成政が肥後の国主となるが失脚。天正十六年（1588）小西行長が二十四万石を領し、翌年から新城を城山に築き始めたため、宇土城（西岡台）は廃城となる。

慶長五年（1600）加藤清正は宇土城攻めに際し、西岳に本陣を置く。関ヶ原の戦い以後は、

加藤領になり、清正は隠居城とするために、宇土城（城山）を改修する。慶長十六年（1611）清正死去。翌年、幕命により宇土城は破却される。正保三年（1646）細川宇土藩が成立するが、陣屋を置き城を築くことはなかった。

第3章 これまでの調査

3. 1 第1次調査の概要

市立鶴城中学校の移転に伴う事前の発掘調査を昭和49年3月から昭和51年3月までの約2か年間にわたり、千畳敷と三城を中心に行った。

本城の主郭である千畳敷からは、古墳時代のV字溝と中世宇土城に関係する掘立柱建物跡2棟、頂部を巡る箱堀などを確認した。V字溝(SD01)は、幅約4m、深さ約3.7m、底幅5～20cmを測り、千畳敷の南側から西側にかけて頂部平場を取り囲むように約130mにわたって検出された。遺構の中心となる頂部平場と一段下った北側から東側にかけては、未調査であるためははっきりとしたことは判らないが、平場に集落跡がありそれを防御するためのV字溝が巡っていたものと推察される。時期としては、大量に出土した土師器から古墳時代前期と考えられる。

また、中世の宇土城に関係する箱堀もいくつか確認された。その中ではSD02が最大規模である。SD02は、最大幅約5m・深さ2.5m・底幅約2～3mを測る逆台形状の堀(濠)で、SD01と同じように南側から西側にかけて約100mにわたって検出された。これも、平場を取囲むようにして一周するのではないかと推定される。2棟の建物跡は、平場の南側から検出された。SB01は、主軸は南北で長辺に6ヶ所・短辺に3ヶ所の柱穴をもち、その規模は約9.2m×5mを測る。SB02は、SB01の南側に建ち、主軸は東西で長辺に4ヶ所・短辺に2ヶ所の柱穴をもち、規模は約7.5m×3.5mを測る。

三城からは、4棟以上の建物跡・門跡・柵列・数条の溝・水溜め状遺構等が確認された。建物跡は、主軸方向によって南北と東西の2種に大別できる。主軸を南北にもつSB03と04は、それぞれ約6m×3.7mと約8.5m×3.8mを測る。主軸を東西にもつSB05と06は、前者が約8.3m×5.2m、後者が約8.7m×4.6mの規模である。特に、SB05は柱穴の並びが他の建物と違っており、複雑な造りであったことが判る。平場の東端には、門跡(SB08)とそれに伴う古道と階段状遺構(SX01)や柵列(SA01)も検出された。門は4本の柱を方形に立てたもので、一辺の長さは全て1.9mである。門としては少し小さ過ぎる感じは否めないが、他の遺構を考え合せると間違いなからう。柵列は門の前から始まり、古道と崖面に沿って検出された。柵の柱と柱の間隔は110cm～190cmとまちまちであった。溝は6条が検出された。そのうちSD09は、幅1m～1.3m・深さ15cm～60cmの箱形をした浅い溝で、三城平場の西側で30mにわたって弓状に検出された。この溝の途中には、水溜め遺構と考えられるSK04がある。これは一辺が130cmの角のとれた立方体状を呈し、SD09を伝わって北側から流れてきた水を溜めて、水が増えたら南側へ流れる仕組みになっていた。また、平場を東西にはしるSD07とSD08は、分れてはいるが規模・形

共に変わらず対をなすものと考えられる。どちらも幅50cm～120cm・深さ30cm～110cmを測り、断面はV字状をなす。平場の西端では、このSD08がSD09を切っており、両者の前後関係が判る。

この他、西岡神社裏手のC地区からは建物跡3棟・土師器埋納遺構・古墳時代の箱式石棺1基など、三城平場に検出された柵列の南側下段にあたるJ地区では建物跡2棟、J地区の西側下段のF地区からは建物跡3棟が検出されている。

各時期毎に遺物を見てみると、

縄文時代 西岡台貝塚から、縄文早期末～後期の土器が出土した。層序的には、第5層（最下層）から轟A式・B式・C式・曾畑式といった早期末～前期の土器、第4層からは並木式系統・竹崎式といった中期前半の土器、第3層からは中期後半～後期初頭の阿高式系統の土器、第2層からは後期の鐘ヶ崎式の土器となっている。石器としては、ほとんどが表採であるが石鏃・スクレーパー・石匙・磨製石斧など、骨角器としては、鯨の脊椎骨を利用した台（高さ19.7cm・幅16.3cm）・結合式釣針などがあった。

古墳時代 千畳敷のV字溝から、4世紀末～5世紀初頭の大量の土師器（布留式）と獣形鏡が出土した。この土師器には、墳墓などに伴う特殊な器形のものは含まれておらず、生活跡に伴うものである。千畳敷からは他に埴輪片も出土しており、古墳の存在を考えさせられる。C地区からは、人骨一体を埋葬した箱式石棺（幅20～35cm・長さ187cm）が検出された。年代の決め手になる遺物はないが、構築方法から見て4世紀後半～5世紀のものであろう。

奈良時代～平安時代 V字溝より、高台の付いた土師器が数点出土しており、V字溝がこの時代には完全に埋没したことが判る。

中世 SD02から、鎌倉時代の五輪塔・宝篋印塔などの残欠が投捨された形で出土した。五輪塔は、水輪と風・空輪だけであったが、宇土城跡（城山）の小西時代の石塁には、五輪塔の地輪と火輪が転用されている。宇土城が西岡台から城山へ移った際に、付近にあった五輪塔を集めて、比較的安定性のある地輪と火輪は城山へ運び石塁に転用し、安定性のない水輪と風・空輪は西岡台の堀（濠）を埋めるために投棄されたのであろう。この時代のものとしては、大陸から移入されたと思われる南宋期の青磁と白磁が千畳敷から、三城からは備前焼II期の壺の小片が出土している。室町時代から戦国時代にかけての遺物は、完形のものこそ少ないが量としては比較的が多い。千畳敷から、赤と緑で彩色された雲竜文の描かれた磁器が出土している。時期的には、15世紀末～16世紀初頭のものである。この他には、明代～清代初頭にかけての染付・青磁・白磁などの破片が多かった。C地区の土壌から出土した300枚以上の土師器皿は、何の目的で埋められたのかは判らないが、戦国から安土・桃山時代にかけてのものであろうと考えられる。

3. 2 第2次調査の概要

農業用排水路の改修工事に伴い、西岡台西端にある用水路をコンクリートブロックで造り変えることになった。ここは指定域の境ではあるが、西岡台貝塚が隣接し貝殻の散布も見られるため、市教育委員会では昭和58年12月から昭和59年2月までの約2か月にわたって発掘調査を行った。

遺構としては、5基の貯蔵穴を確認することが出来た。貯蔵穴は、全て凝灰岩層の上にある透水層に掘り込まれており、常に新鮮な地下水が通り抜けるような仕組みとなっていた。貯蔵穴の概要は第2表の通りであるが、時期としては縄文時代前期から中期にかけてのものであると考えられる。また、貯蔵穴内に遺存していたドングリ類をはじめとする植物遺体については、名古屋大学文学部助教授の渡辺誠氏によって分析がなされている。それによると、全体の96%が食用化できるイチイガシなどのコナラ属であり、残りが食用化できないクスノキなどの種子であった。コナラ属の内、種の同定が可能であった198点については、イチイガシ77.3%・アカガシ14.1%・シラカシ8.6%の割合であった。このうち、イチイガシだけはアク抜きをせずに食用化でき、あとの2種はアクぬきのために水さらしが必要であるという。このことは、貯蔵穴が透水層に掘り込まれていることと合せて興味深い。また、混入したと考えられるクスノキ・センダン・エゴノキなどの種子についての観察・分析によっても、ドングリ類を貯蔵した時期が秋であることを明らかにされている。

この調査による出土遺物としては、ドングリ類の他に大量の縄文式土器や石器などがあつた。出土した縄文式土器は、轟B・C・D式、曾畑式、阿高式、南福寺式、出水式、北久根山式、船元式、御手洗A・B式土器に分けられ、時期的には縄文前期から後期にかけての土器である。石器には、石鏃・石匙・石錘・磨石・磨製石斧などがあつた。

第2表 貯蔵穴一覧表

		1号貯蔵穴	2号貯蔵穴	3号貯蔵穴	4号貯蔵穴	5号貯蔵穴
形状	平面形	円形	楕円形	楕円形	円形	円形
	断面形	袋状	筒状	逆台形	逆台形	筒状
計測値	上場	径122cm	145×105cm	77×55cm	径90cm	径75cm
	底	119×110cm	121×90cm	47×30cm	径45cm	径50cm
	深さ	77cm	70cm	40cm	45cm	60cm
	底の標高	1.60m	1.77cm	1.97m	1.91m	1.96m
出土遺物	ドングリ	量	多量	少量	微量	微量
		出土状態	木の葉、枝等と混在	底の方に少量	壁に付着	底の方に僅かに残る
	その他の遺物	木製品片	石錐	—	—	—
工具痕		残る	—	—	—	—
使用状況		使用中	廃棄	廃棄	廃棄	廃棄
備考		底から48cmの所で僅かにくびれる				

第4章 調査の記録

4. 1 遺 構

第1次調査により三城頂部は、ほぼ全面が調査されており、その状況はすでに確認されているので、今回の調査地区は、主に頂部より一段下がった地点の平場の性格の把握のために調査地（トレンチ）を設定した。

4. 1. 1 T8701調査地

第1次調査で検出したSA01（柵列）の北側延長部確認のため、南北方向に幅2m、長さ8mのトレンチを設定した。

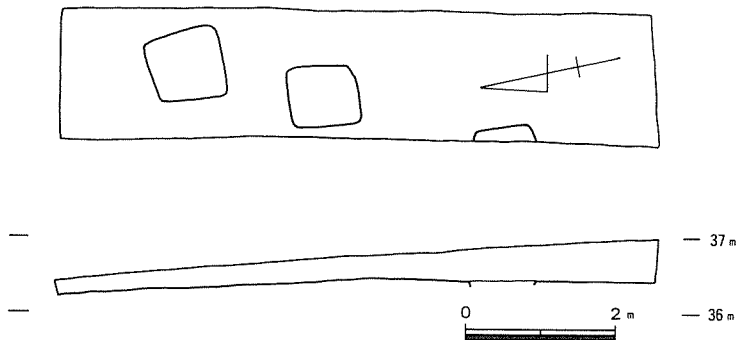
表土を剥ぐとすぐ地山に達する。検出した遺構は1辺が80cm～100cmの隅丸正方形の柱穴3個である。

SA01は、柱穴の大きさは径30cm～70cm、平面形は円形、柱間は1.1m～1.9mを測り、規模・並び共に不揃いである。今回検出の遺構はSA01に続くものではなく、他の建物の柱穴の一部と思われる。SA01はさらに崖側に存在していたものと思われる。現状で比高差約3mの崖面があるが旧状より内側へ削られたため遺存しないと推測される。

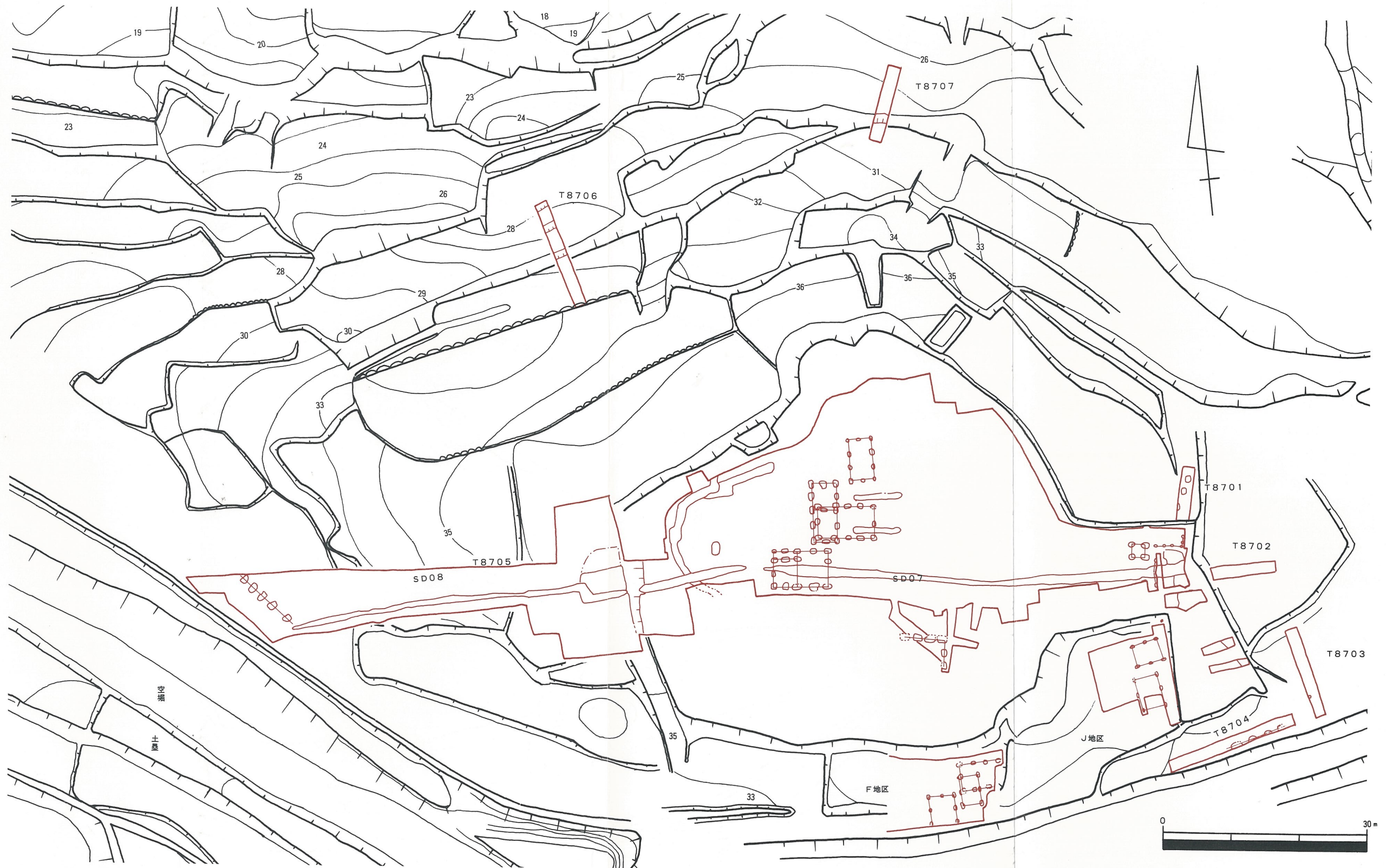
4. 1. 2 T8702調査地

第1次調査で確認されたSD07（溝）の延長上、三城頂部より3.3m低い位置に2m×10mの東西方向のトレンチを設定した。SD07は三城頂部を東西に横断し東端に排出する排水溝である。

トレンチで確認した遺構は、隅丸正方形の堀込みを確認したが埋土の締りもなく城郭に伴うものではないと思われる。



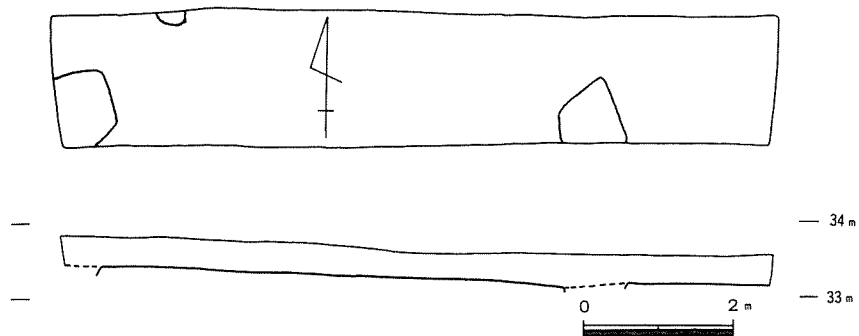
第4図 T8701調査地実測図 (1/100)



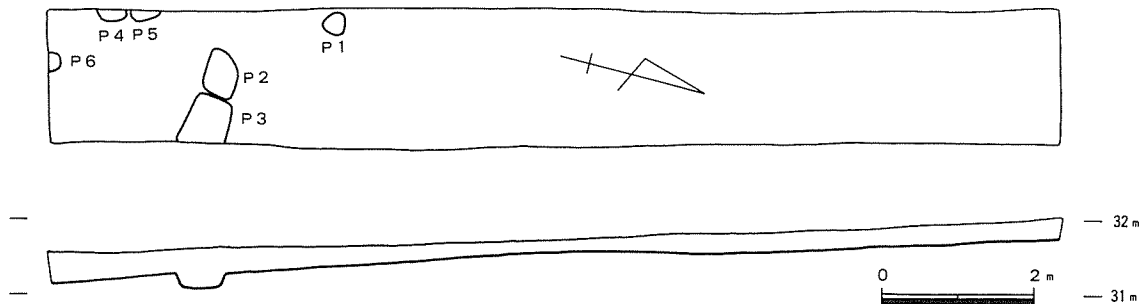
第5図 調査地配置図 (1/600)

4. 1. 3 T8703調査地

本調査区は、T8702の南側のすぐ下段に位置する。崖面から南北方向に長さ14m、幅2mのトレンチを設定した。崖面側（北）は、かなり削平されており、十数cmで地山に達し、遺構はひとつも確認されなかった。また、トレンチ南側では6個のピットを確認し、そのP01から紡錘車が出土した。



第6図 T8702調査地実測図 (1/100)



第7図 T8703調査地実測図 (1/100)

4. 1. 4 T8704調査地

T8703の遺構確認部分側の西に直交するトレンチ（規模2m×20m）を設定。トレンチのほぼ全面に遺構が広がる。それらのほとんどは柱穴と思われるもので、柱穴の並びSA870401を確認した。

SA870401

柱穴P10・P7・P4・P2で構成し、それぞれの柱間は2.5m・2.8m・3.0m、方向N-75°-Eを測る。柱穴は円形・楕円形・隅丸長方形をなし、長径は1.2m～1.5mを測る。柱列は、柵列または建物が考えられる。

4. 1. 5 T8705調査地

三城頂部の西端から空堀にかけ幅2m、長さ60mの調査区を設けた。トレンチの東側にSX870501の一部と西側の堆積土から遺物が出土したため、トレンチ東側を拡張した。SX870501の全容とSD08がさらに西側へ延びるのを確認したため、さらに拡張した。トレンチ西端に空堀と並行する柱穴列（SA870501）を検出した。

SD08

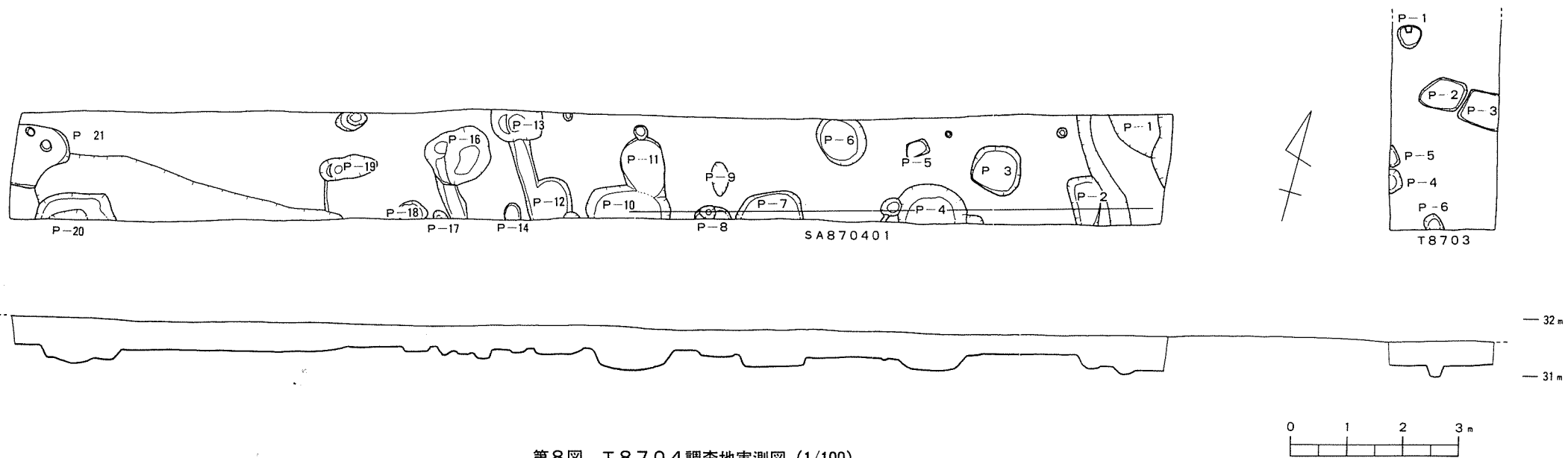
SD08は三城頂部を横断する2本の溝のひとつで西側に流れる。第1次調査で既に11m程が確認されており、今回は頂部部分3.9mと落差部分が2.5mありさらに空堀方向へ50.3mを確認した。第1次調査を含めたSD08の検出長は67.7mになる。頂部部分の幅は1.2mを測り、平場から段下へ落ち始め、底の傾斜が増す。崖面には、水平距離で1.25m、比高差1.43mの部分が遺存しない。一段下がるとはじめは幾分傾斜があるが2mほどで緩やかな傾斜になる。溝は北へほぼ直角に曲がる。溝の廃棄時に投げ込まれたと考えられる安山岩がある。屈折部分は底の距離で1.6mを測り、さらに西へ折れる。この部分で深さ約70cmを測る。さらに9mの地点で検出幅35cm、深さ10cmとなる。地山が段をなしており、かなりの深さ削平されている。これもコーナー部から18mの地点から一定幅（約90cm）になり、26mの地点から落ち始める、水平距離で5.6m、比高差2.2mの斜面を下り、12mで検出部の末端にいたる。頂部との底の比高差7.1mになる。さらに11mで空堀に達する。

SA870501

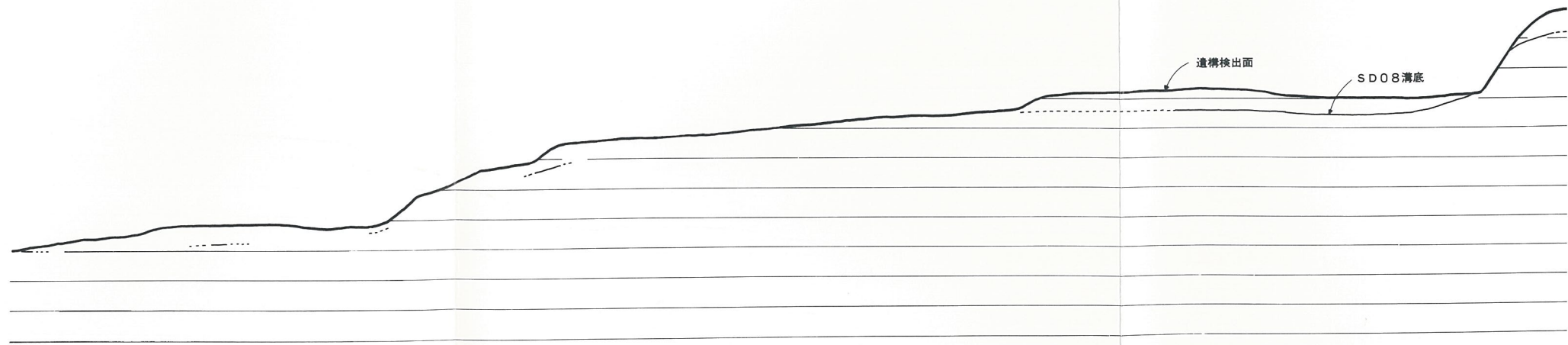
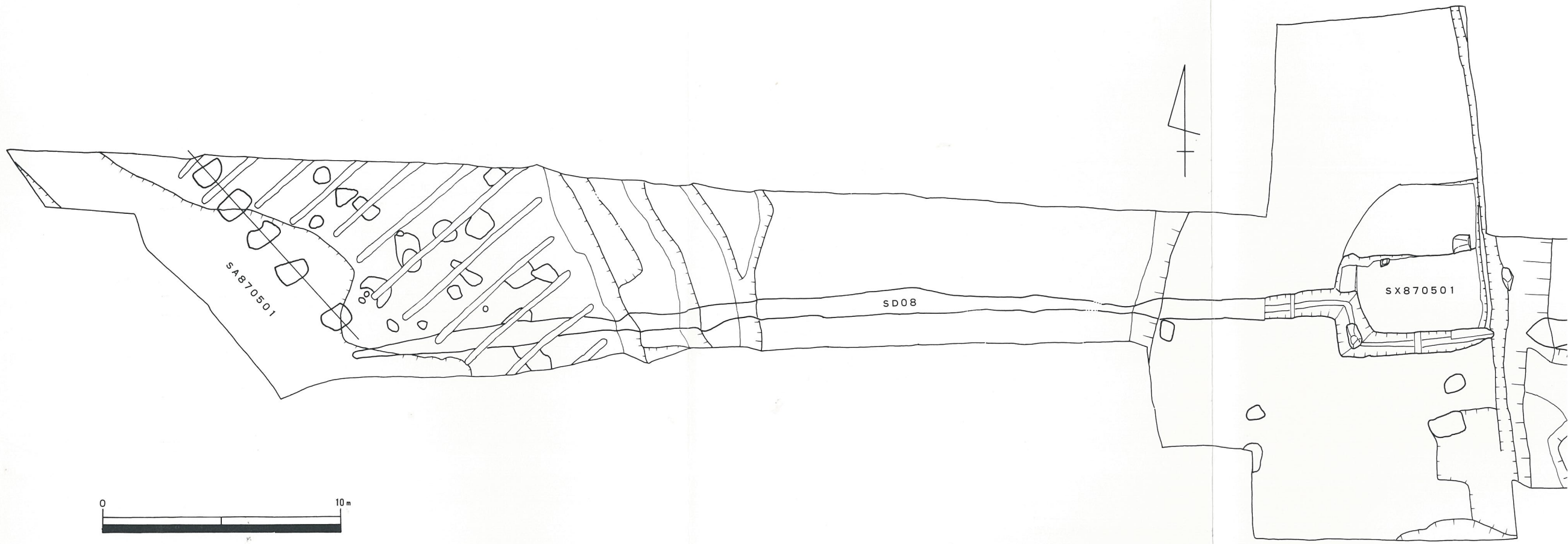
現在の空堀の肩から11mの位置にほぼ並行に柱穴5個が並ぶ。方向N-41°-W、長径1.2～1.4m、短径80cm～90cm、不整形ではあるが隅丸長方形に近い、柱間1.8m～2.8mを測る。柱穴の長辺は並ぶ方向に対し直交する。この柱列に対応する柱穴はない。空堀に並行する柵または塀と思われる。

SX870501

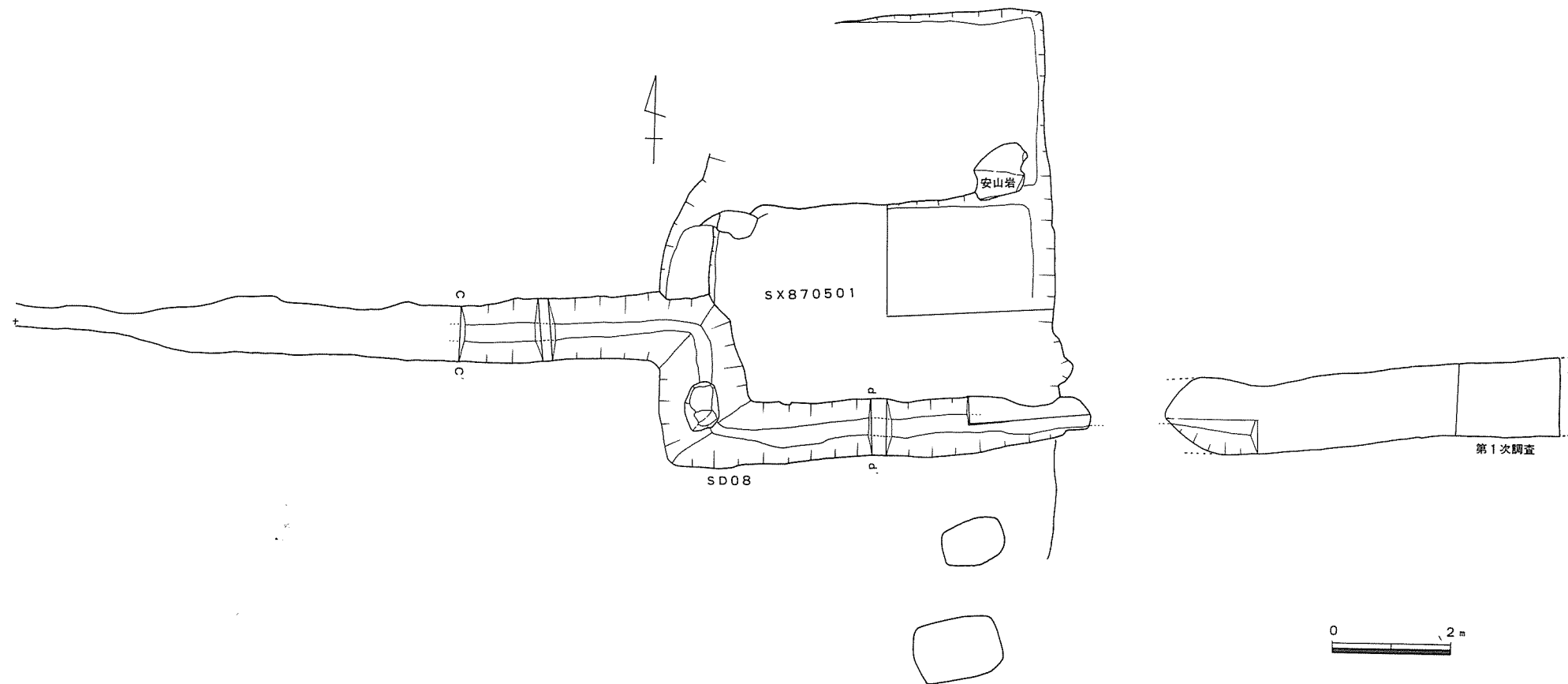
東西6.4m、南北6.5m、北側の深さ30cm、平面形はほぼ正方形、東辺の中間部に地山に含まれた安山岩があり、ここから南側はさらに深くなる。この部分には、人頭大の地山塊が埋め戻



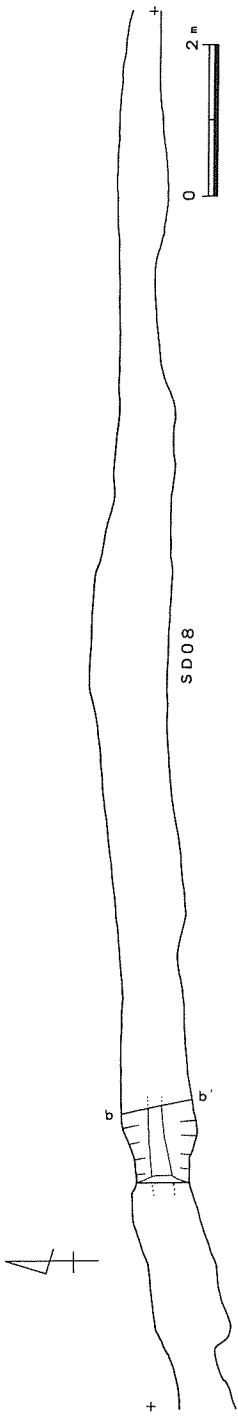
第8図 T8704調査地実測図 (1/100)



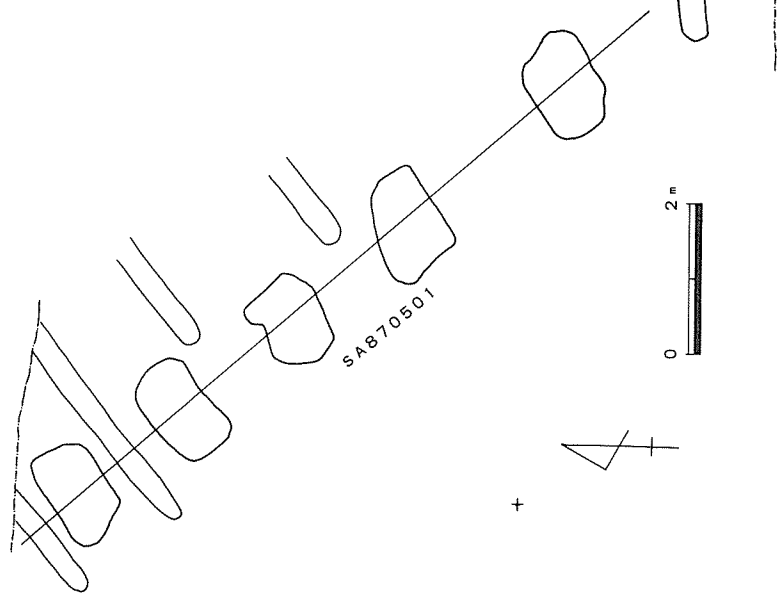
第9図 T8705調査地実測図 (1/200)



第10図 T8705調査地（東側）実測図（1/100）

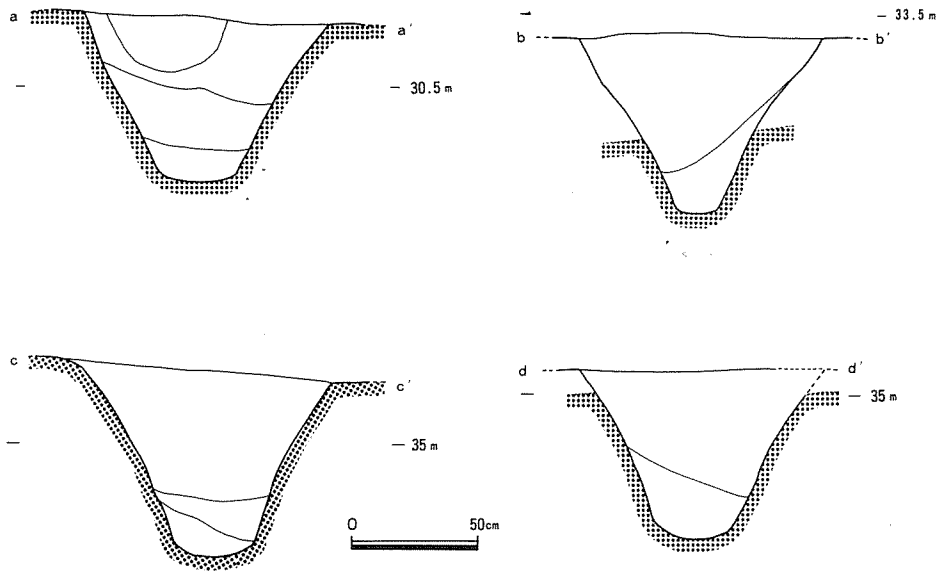


第11図 T8705調査地〈中央部〉実測図 (1/100)



第12図 T8705調査地 (西側) 実測図 (1/100)

されている。



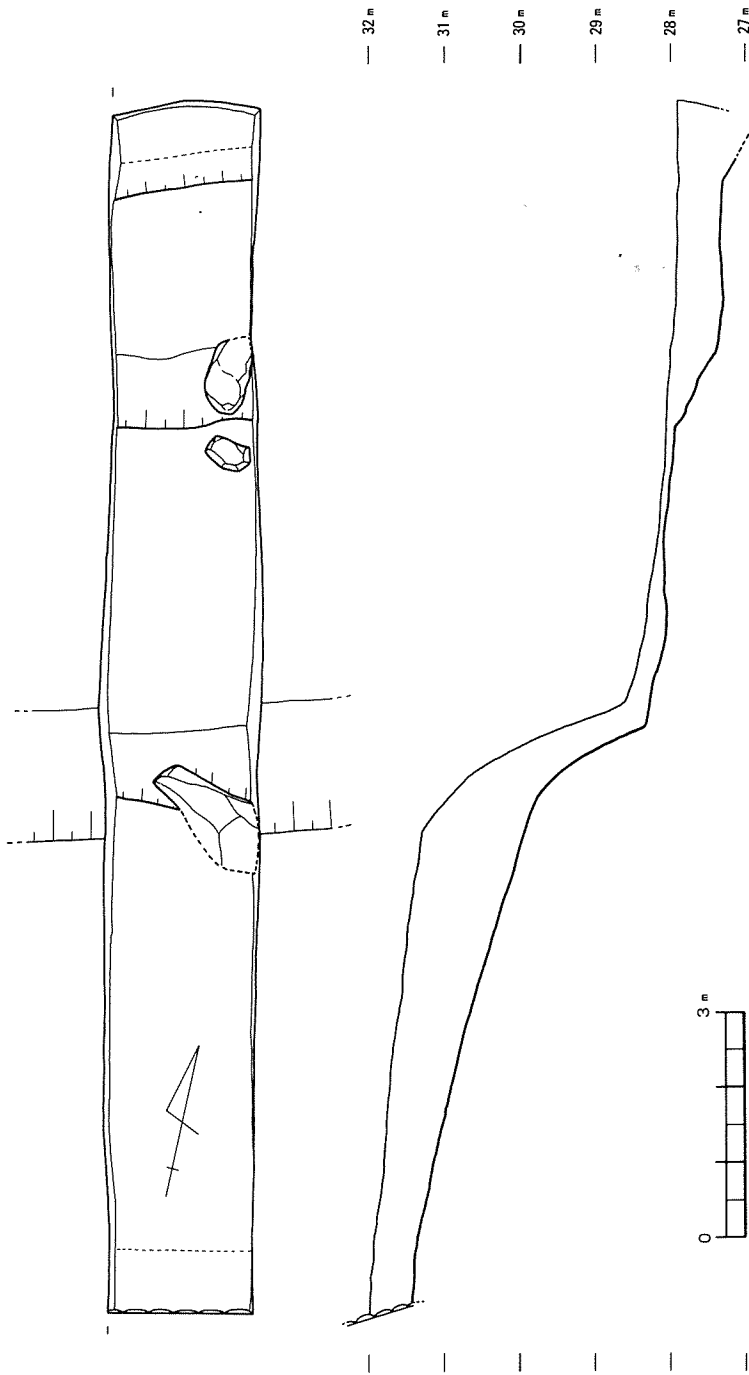
第13図 S D O 8断面図 (1/30)

4. 1. 6 T 8706調査地

三城北側の頂部から3～4段下がった平場に位置する。幅2m長さ16m南北方向のトレンチ。トレンチの中央に比高差3mの崖面がある。南側は南端で1m、崖面側で1.4mの堆積土があり地山面は約15°の傾斜で下がっている。また、北側は削平されている。

4. 1. 7 T 8707調査地

T 8706調査地同様、三城北側の頂部から3～4段下がった平場に位置する。幅2m、長さ12m南北方向のトレンチ。トレンチの中央からやや南寄りに比高差3mの崖面がある。崖を境に上段には約1mの堆積土があり地山面は約10°の傾斜で下がっている。また、下段は削平されている。



第14図 T 8706 調査地実測図 (1/100)

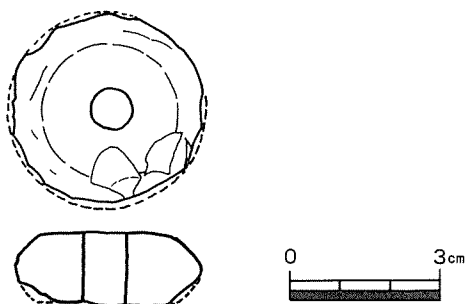
4. 2 遺 物

調査面積に対し出土遺物の量が極めて少ない。これは中世城郭の特徴でもあり、また郭の中心部を外れているためでもある。

紡錘車 T8703調査区のP01出土。滑石製である。円形を呈し、径3.7cm、孔径0.8cm、厚さ1.4cmを測る。孔は両方向から穿孔する。片面は、ほとんどが割れている。



第15図 T8707 調査地実測図 (1/100)

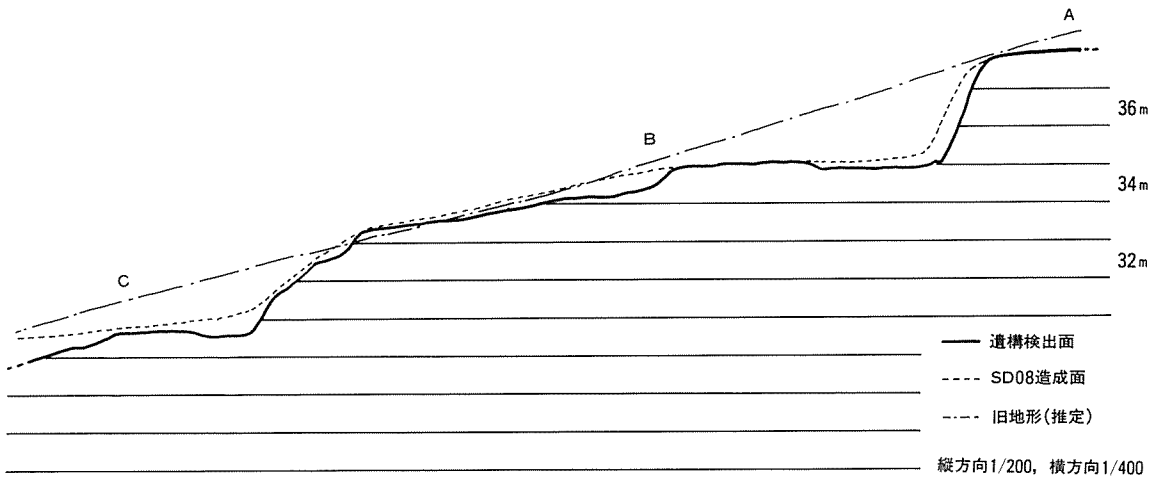


第16図 出土遺物実測図 (2/3)

4. 3 小 結

調査のまとめとして、三城西側部分の旧地形の復原を試みたい。SD08が三城頂部から空堀までの連続した溝である。その上部はかなり削平されている部分もあるので、底の標高を規準に溝の深さをほぼ一定であったものとする。

三城頂部の平場をA、一段下がった平場をB、さらに下段をCとする。旧地形は緩やかな傾斜地と仮定する。Aは、建物跡が検出されており、ほぼ水平に整地された。BはAより2.5～3mの段差を設ける、このとき削られた土を主にBの西端に盛る。CはBより2.5mほど低くなる。このときの土が空堀の上部に盛られ空堀の高さを増しているものと考えられる。



第17図 旧地形復原図

第5章 最後に

今回の調査の成果については、前章の小結で述べているので、ここでは城郭の整備上の問題点のひとつであった三城北側に存在する石垣について考えてみたい。

今回調査を行った三城の北西側に安山岩割石を積み上げた石垣が5ヶ所ほどある。そのなかの一つはT8705調査地、もう一つはT8706調査地にある。T8705調査地においては、SD08が存在する斜面に築かれている。SD08は三城において、最も新しい時期の遺構のひとつであり、石垣はSD08より新しいことが判る。

次に、中世から近世初頭の城郭の発掘調査例に基づいて、石垣の変遷のなかで考えてみる。

宇土城跡（西岡台）^(註1)は基本的な防御施設は土塁と素掘りの堀である。田平城跡^(註2)は土塁と素掘りの堀。土塁には簡単な石積みを設けてある。宇土城跡（城山）下層^(註3)は自然石や石造物の転用材の野面積み。宇土城跡（城山）上層^(註4)は典型的な打込ハギの石垣である。

土塁・素掘りの堀→野面積み石垣→打込ハギ→（切込ハギ）

大略的には、このような変遷であるといえる。城は次のように築かれる。

宇土城跡（西岡台）・田平城跡→宇土城跡（城山）下層→宇土城跡（城山）上層

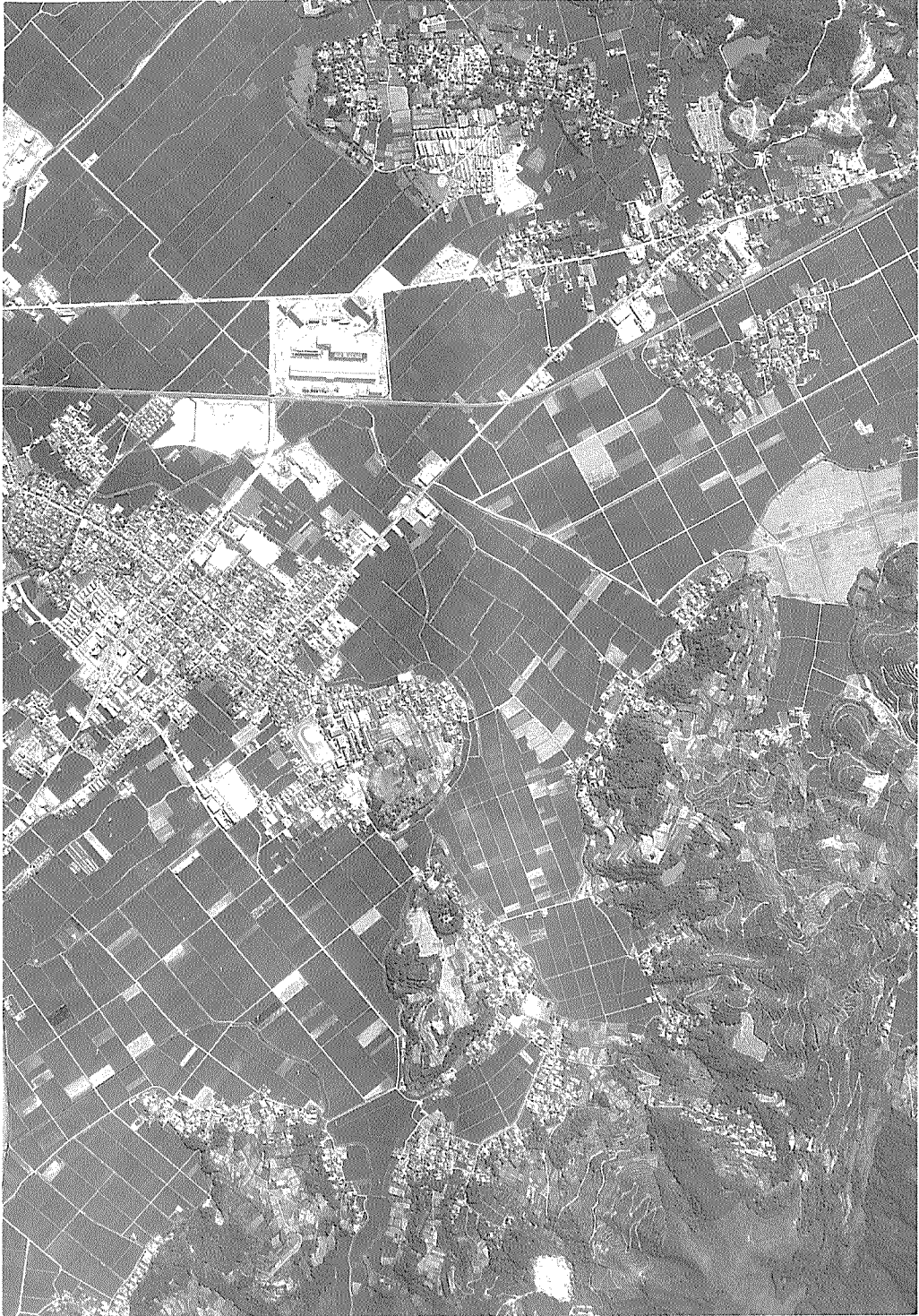
城の防御施設は、その当時の最高の技術をもって城の主郭より施されるのが原則と考えられる。全国的にも中世城郭に石垣を築いた例は、あまり多くはみることがなく、宇土城跡（西岡台）のこれまでの調査では石材を用いた施設は確認されてない。また、宇土城跡（西岡台）は、宇土城跡（城山）下層の城郭を築く時に廃城になっているので、この時期以降に、城郭の施設として築いたものとは考えにくい。

位置的には、石垣は城郭の主体部を外れている。また、この部分は地質上崩壊しやすいところである。城跡は近世にはすでに段々畑になっており、石垣は畑の区画と崩壊防止のために近世以降につくられたものと推察される。城郭に伴う施設ではないと考えられる。

註

- (1) 平山修一・高木恭二ほか『宇土城跡（西岡台）』宇土市埋蔵文化財調査報告書第一集、1977年、宇土。
- (2) 平山修一・木下洋介『田平城跡』宇土市埋蔵文化財調査報告書第8集、1983年、宇土。
- (3) 木下洋介『宇土城跡（城山）』宇土城跡（城山）調査概報Ⅰ、宇土市埋蔵文化財調査報告書第4集、1981年、宇土。
- (4) 註3書。

圖 版



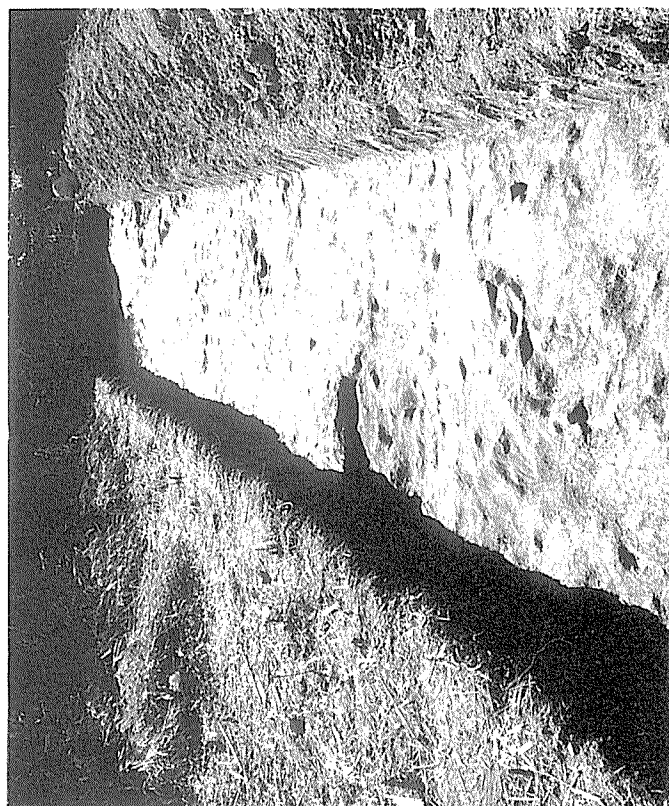
図版 1 宇土城跡（西岡台）空中写真



図版2 宇土城跡（西岡台）遠景



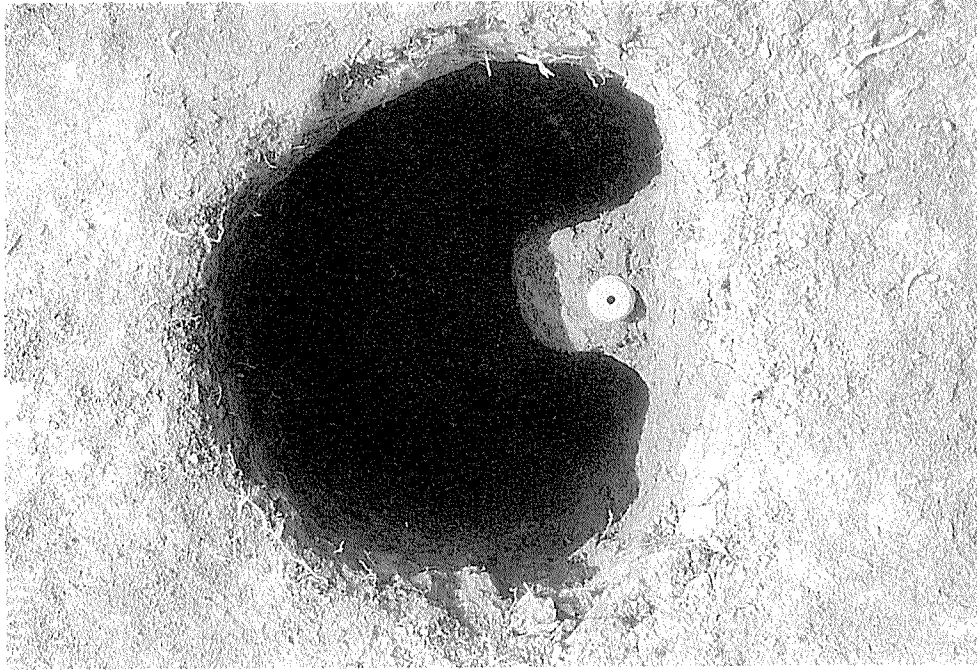
図版3 T8701調査地



図版4 T8702調査地



図版5 T8703調査地



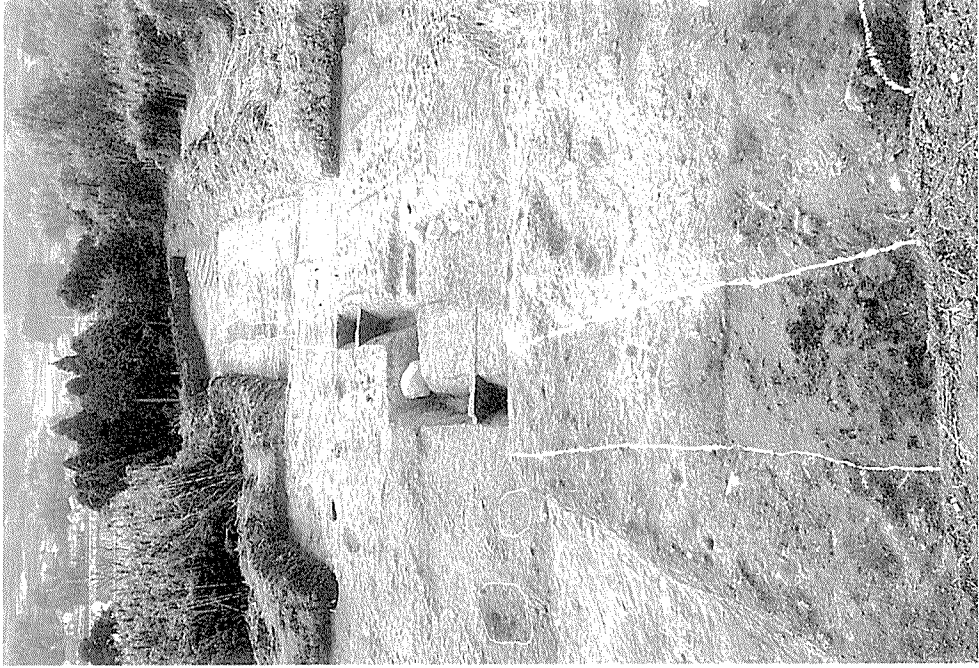
図版6 T8703紡錘車出土状態



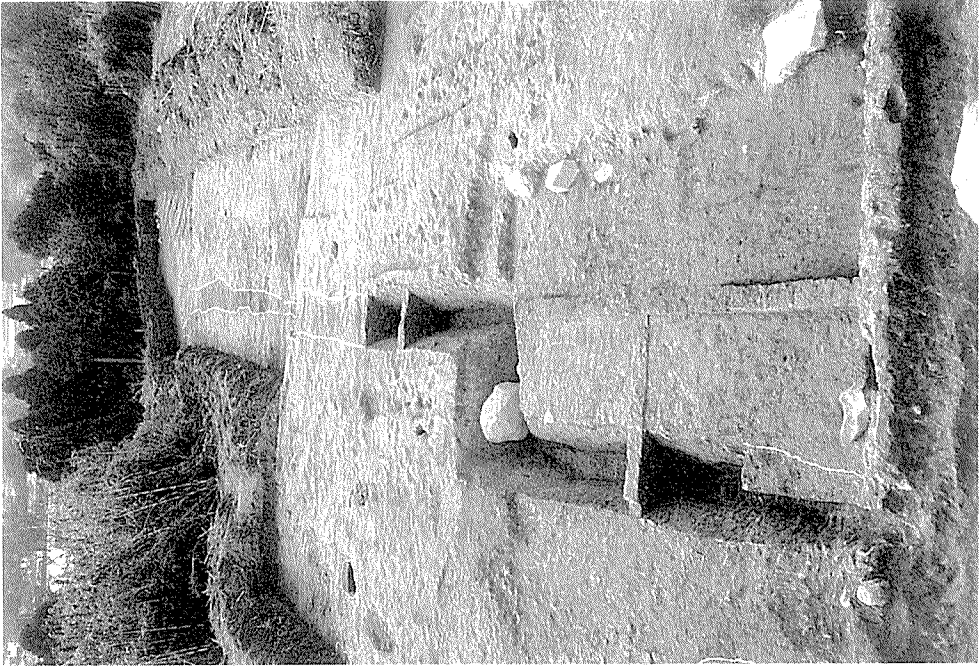
図版7 T8704調査地全景



図版8 SA870401



図版9 T8705調査地全景1 (東から)



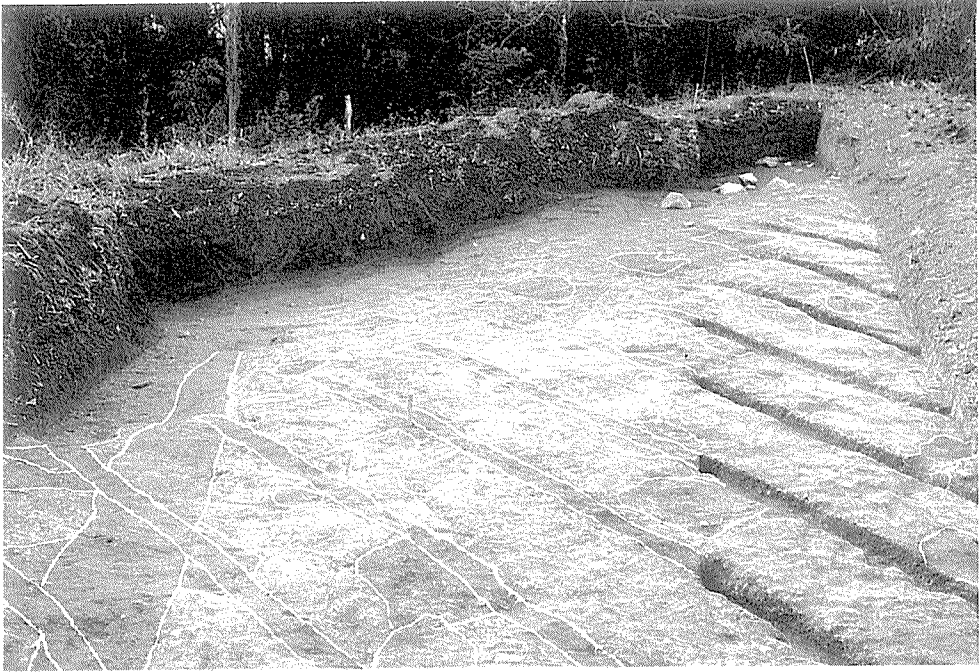
図版10 T8705調査地全景2 (東から)



図版11 T8705調査地全景3 (西から)



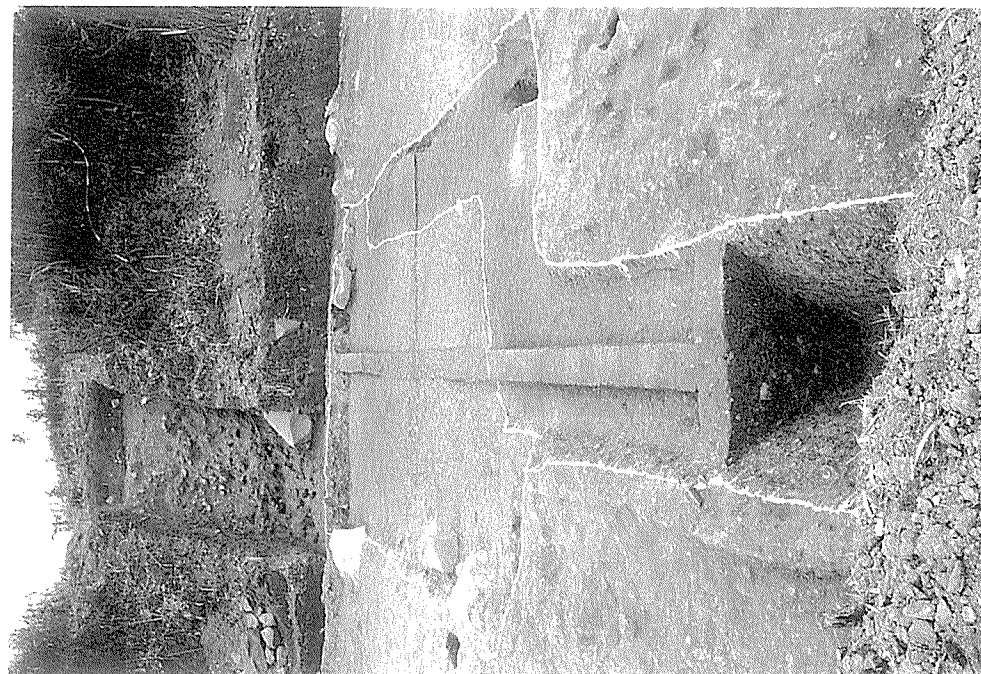
図版12 T8705調査地東部分



図版13 T8705調査地西部分



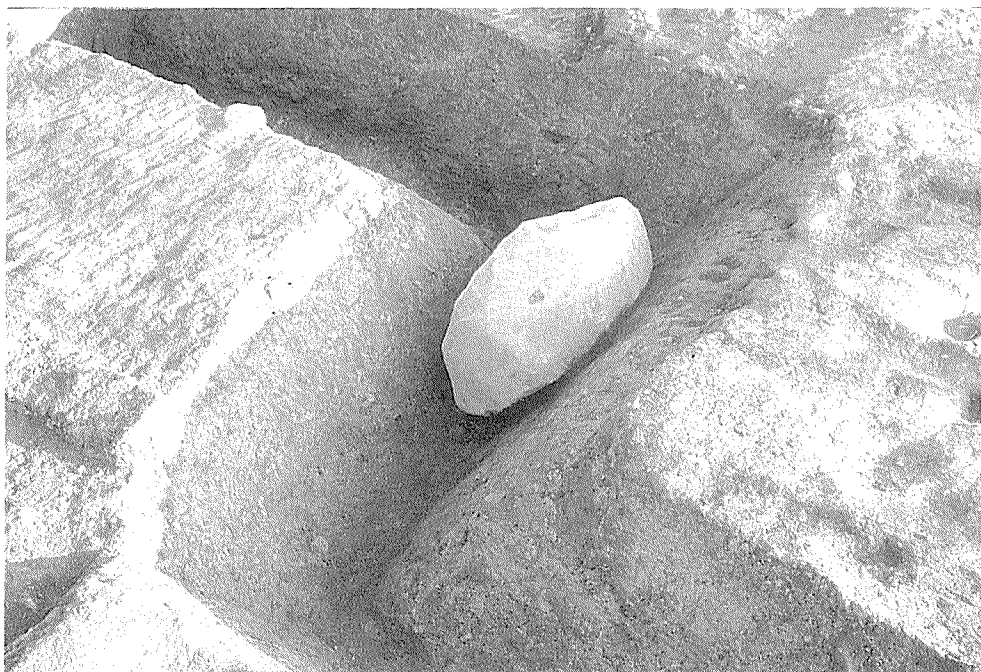
図版14 T8705調査地中央部分



図版15 T8705調査地東部分遺構検出状況



図版16 SA870501



图版17 SD08屈折部分



图版18 SX870501



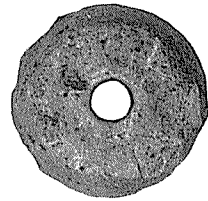
图版19 S D 0 8 土層断面



図版20 T8706 調査地

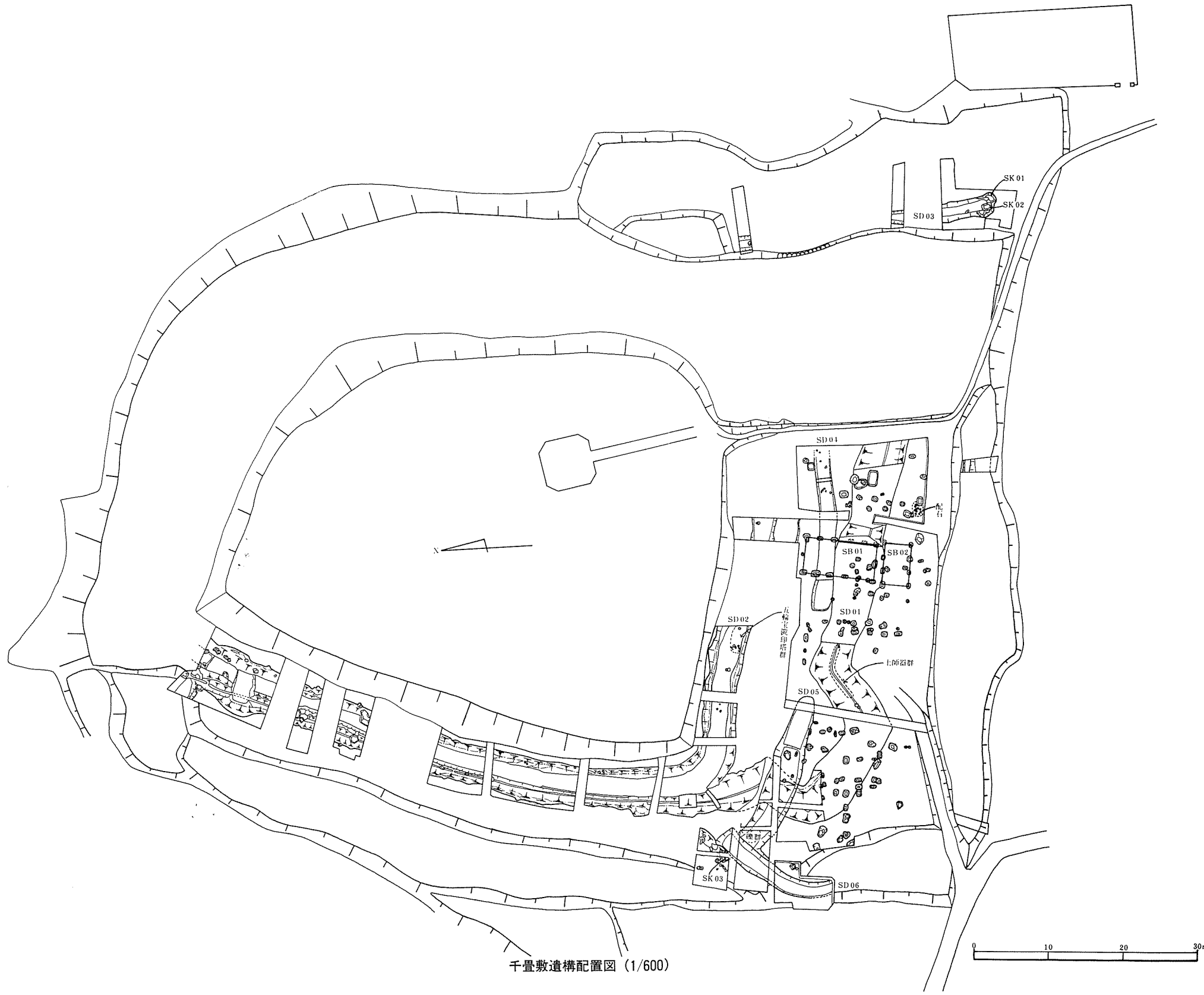


図版21 T8707 調査地

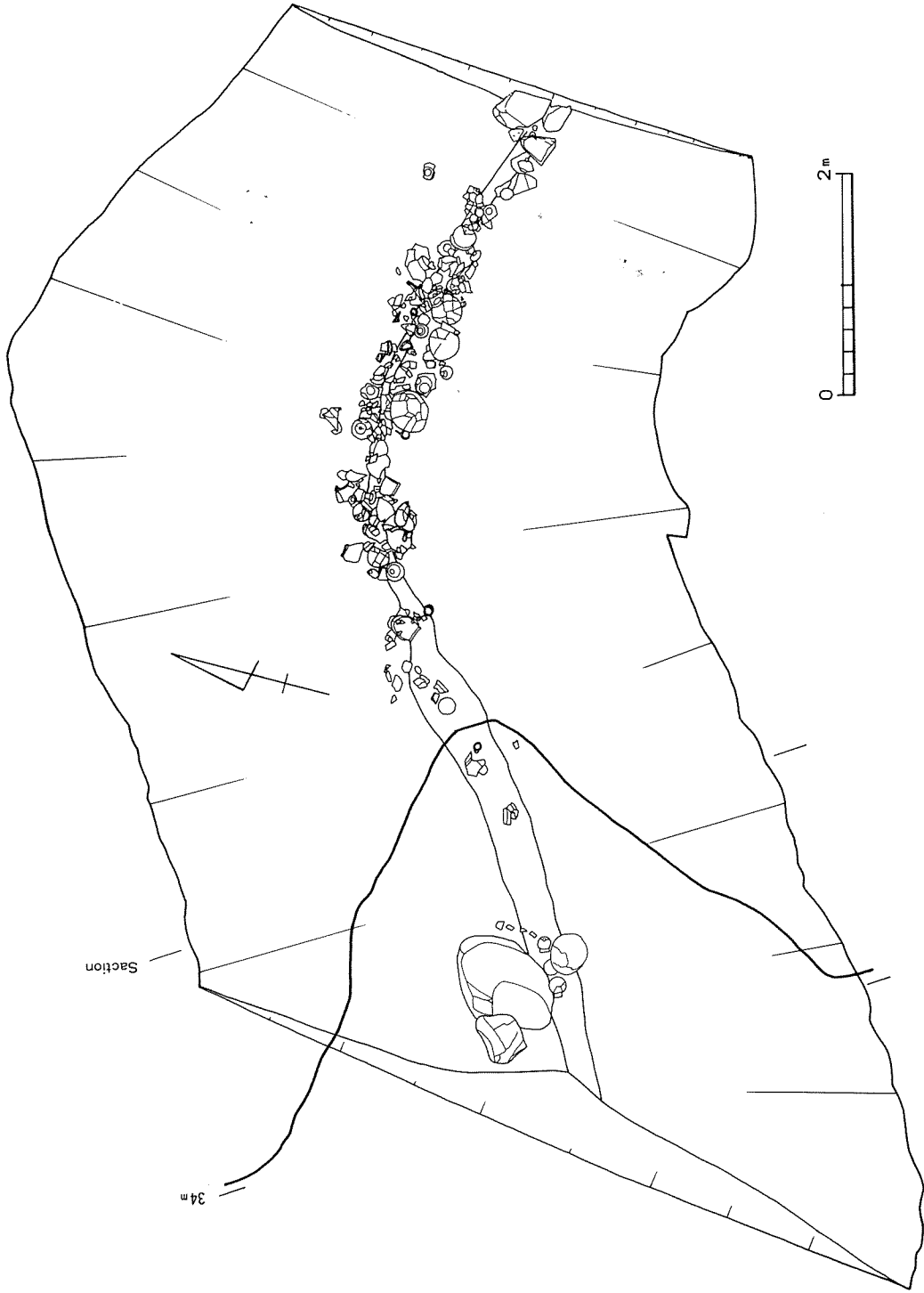


図版22 出土遺物

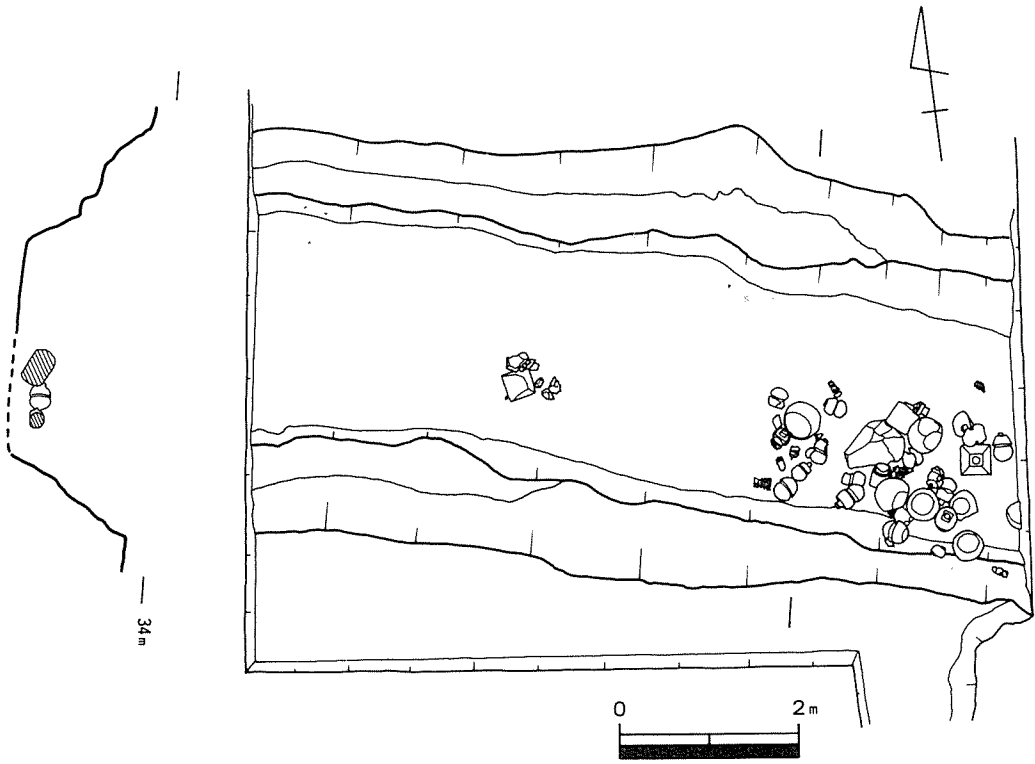
資 料



千壘墩遺構配置圖 (1/600)



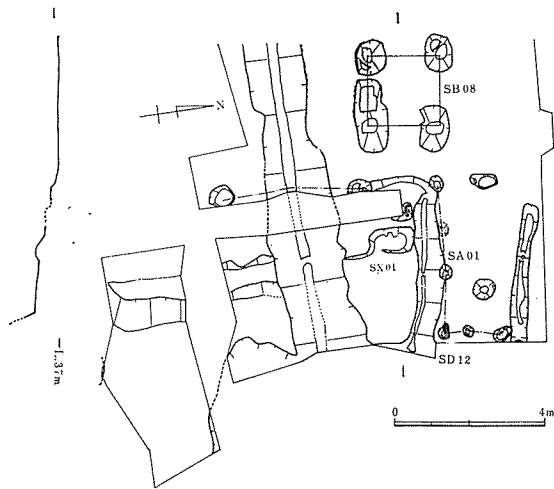
千疊S D O 1 実測図 (1/60)



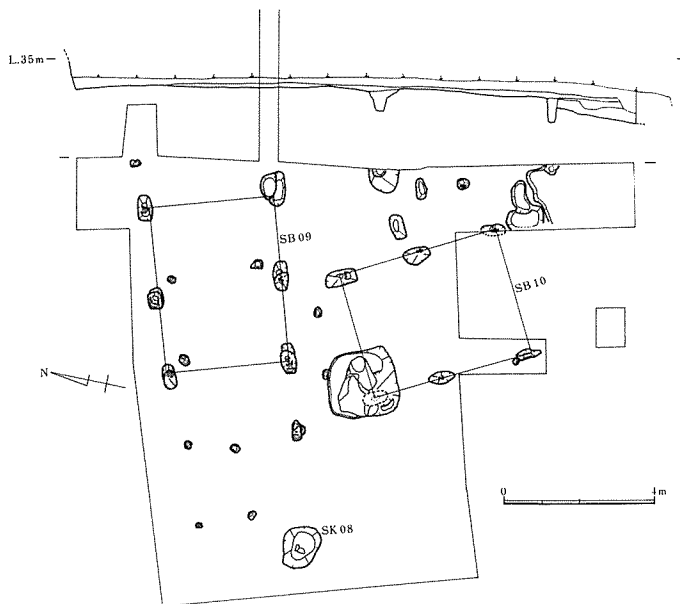
千疊敷SD02実測図(1/60)



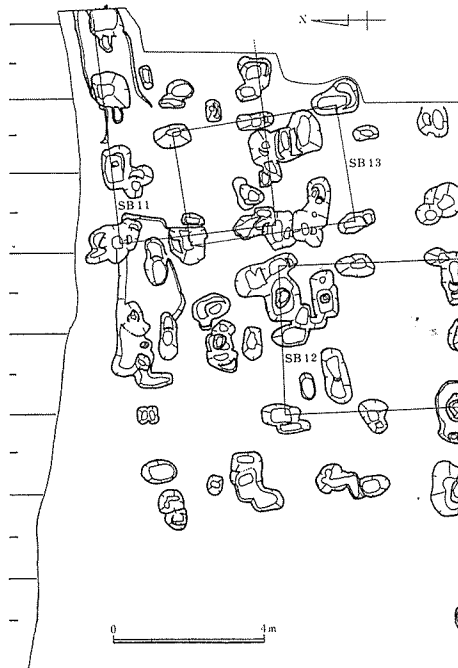
三城遺構配置図 (1/200)



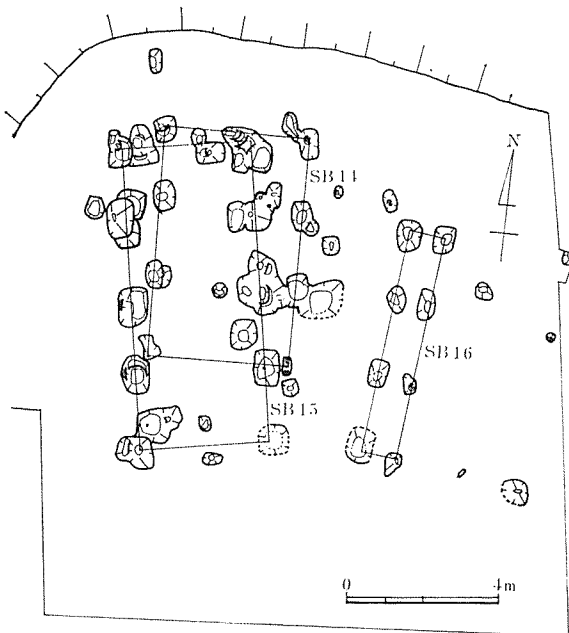
SB08・SA01実測図 (1/200)



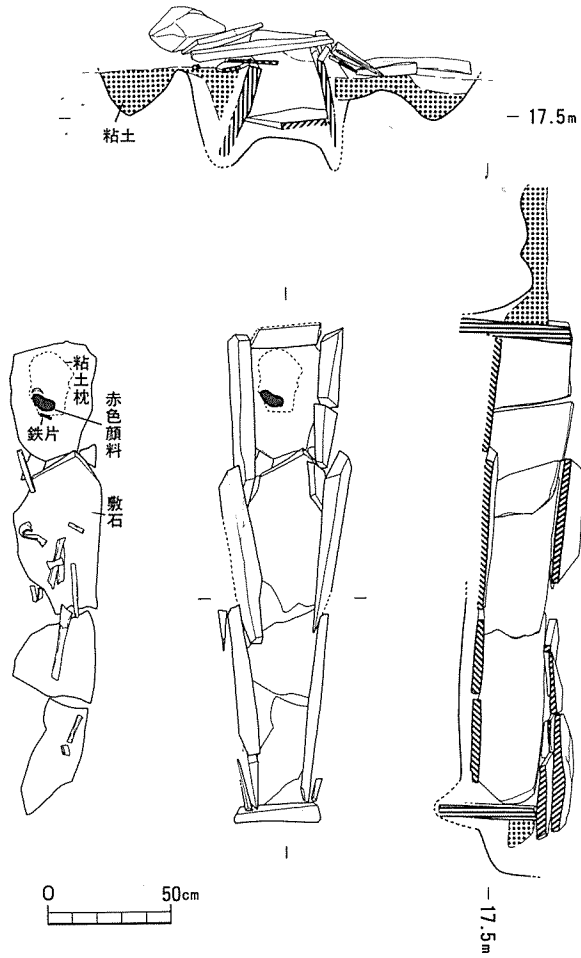
J地区遺構配置図 (1/200)



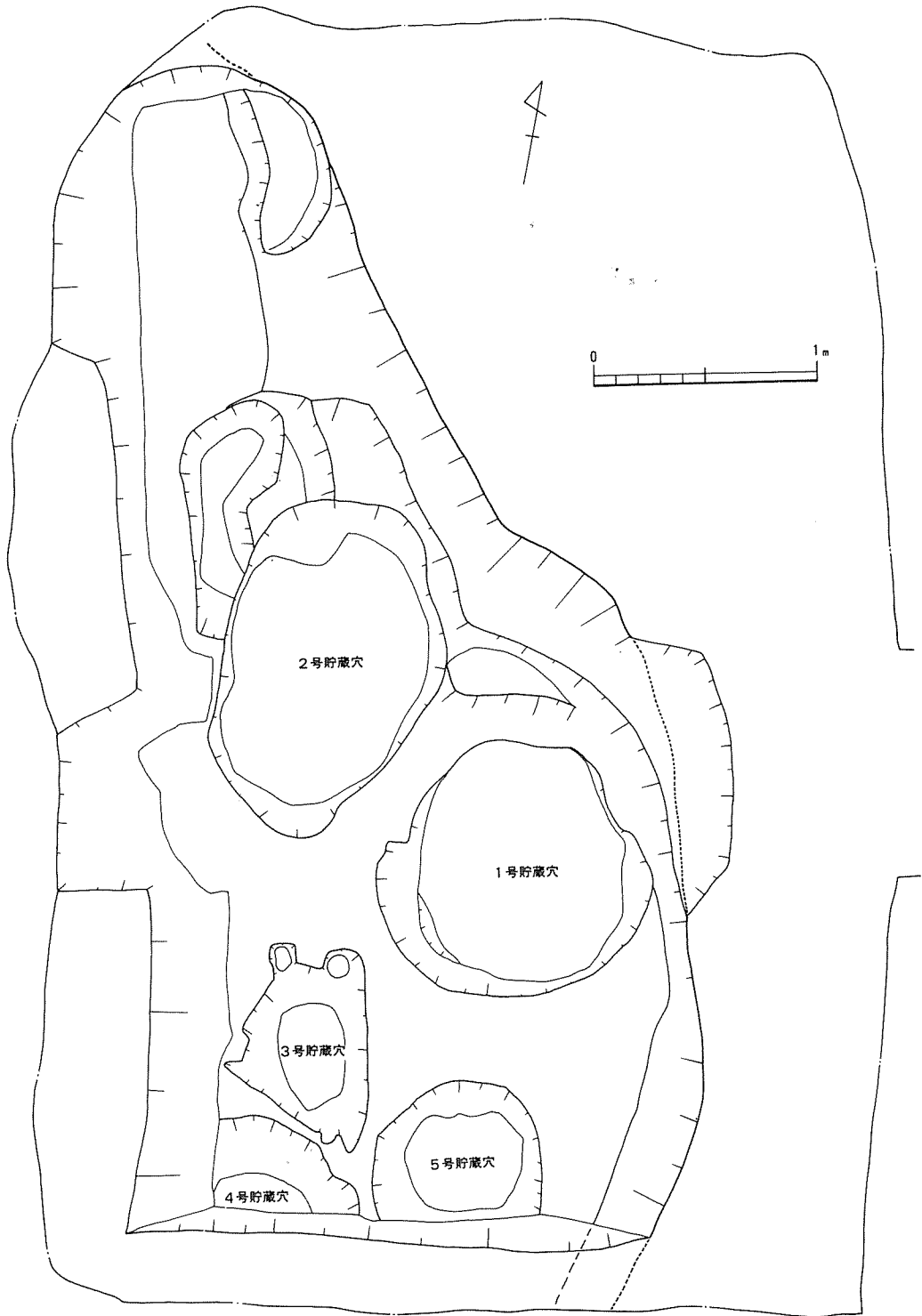
F地区遺構配置図 (1/200)



C地区遺構配置図 (1/200)



箱式石棺実測図 (1/30)



西岡台貝塚貯藏穴実測図 (1/30)



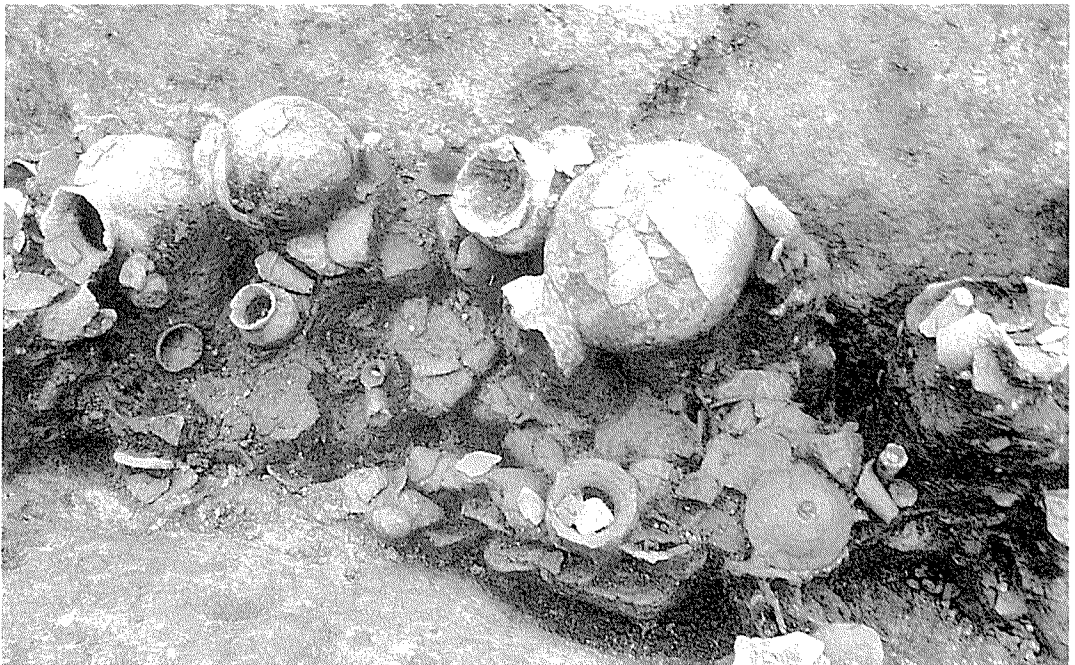
空 堀



土 塁



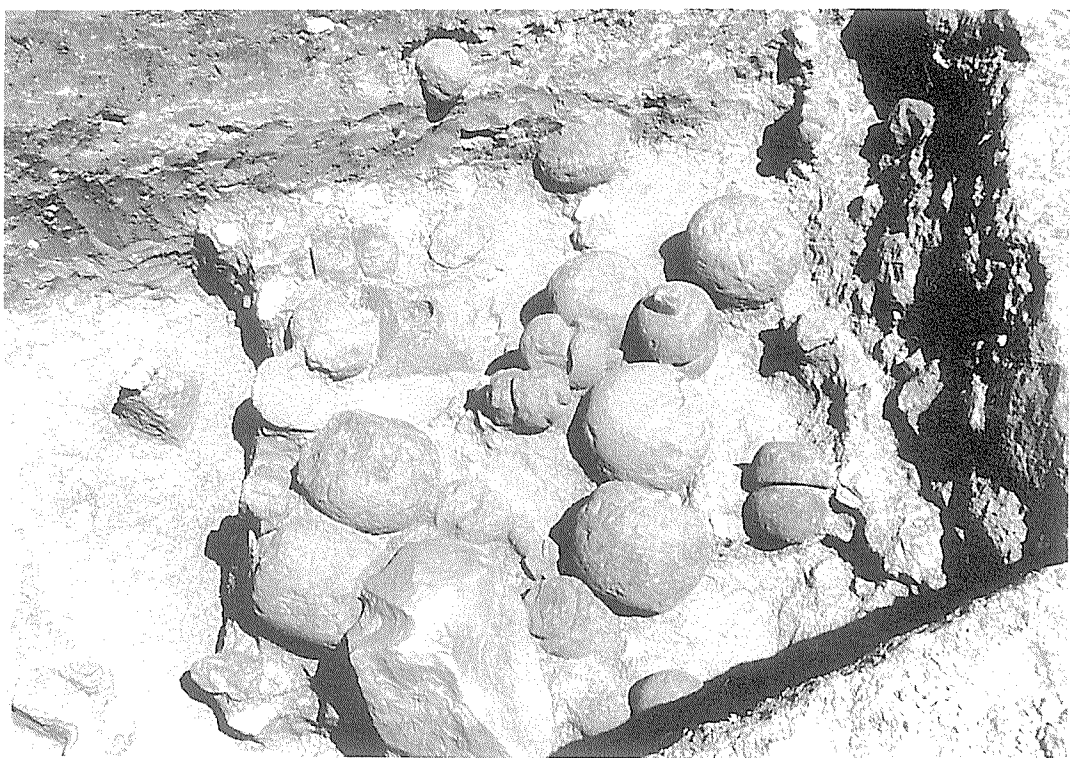
千疊敷SD01



SD01遺物出土狀態



千疊敷SD01・SD02重複状態



千疊敷SD02石造物出土状態



三城柱穴群



三城SD07



三城遺構検出状況



三城SD08



西岡台貝塚出土貯藏穴



史跡宇土城跡整備状況

宇土城跡（西岡台）Ⅱ

宇土市埋蔵文化財調査報告書第18集

昭和63年 3月31日

発行 熊本県宇土市教育委員会

熊本県宇土市浦田町51番地

印刷 (資) 下田印刷

